

大藪遺跡・大藪城跡

2011 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

大藪遺跡・大藪城跡

2011 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、道路整備事業に伴う大藪遺跡・大藪城跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

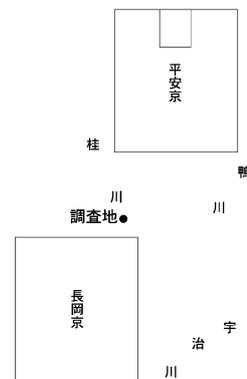
平成 23 年 2 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- | | |
|----------|--|
| 1 遺 跡 名 | 大藪遺跡・大藪城跡 |
| 2 調査所在地 | 京都市南区久世大藪町地内 |
| 3 委 託 者 | 京都市長 門川大作 |
| 4 調査期間 | 2010年7月26日～2010年11月2日 |
| 5 調査面積 | 410.71 m ² (1区 370.75 m ² 、2区 39.96 m ²) |
| 6 調査担当者 | 南出俊彦・田中利津子 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図(縮尺1:2,500)「久世」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系VI(ただし、単位(m)を省略した) |
| 9 使用標高 | T.P.:東京湾平均海面高度 |
| 10 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 11 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。 |
| 12 遺物番号 | 種類ごとに通し番号を付し、土器類は番号のみとしたが、瓦類は「瓦」、金属製品は「金」、石製品は「石」、木製品は「木」をそれぞれ付し、写真番号も同一とした。 |
| 13 本書作成 | 南出俊彦・田中利津子 |
| 14 執筆分担 | 南出1～3・5、田中4 |
| 15 備 考 | 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。 |



(調査地点図)

目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の経過	2
2. 位置と環境	3
(1) 位置と環境	3
(2) 周辺の調査	5
3. 遺 構	6
(1) 遺構の概要	6
(2) 1区の遺構	6
(3) 2区の遺構	17
4. 遺 物	23
(1) 遺物の概要	23
(2) 土器類	23
(3) 瓦類	31
(4) 金属製品	31
(5) 石製品	32
(6) 土製品	33
(7) 木製品	33
(8) その他の遺物	36
5. ま と め	37
(1) 遺構の変遷	37
(2) 中世大藪城について	39

図 版 目 次

図版1	遺構	1	1区東半全景 [室町時代後期から江戸時代初頭] (北西から)
		2	1区西半全景 [室町時代後期から江戸時代初頭] (北から)
図版2	遺構	1	建物1柱穴105 (東から)
		2	建物1柱穴114 (北から)
		3	建物1柱穴157 (北から)

- 4 建物1柱穴 226 (北から)
- 5 東門柱穴 218 (東から)
- 6 東門柱穴 249 (東から)
- 7 柱穴 295 (北から)
- 8 柱穴 297 (南から)
- 図版3 遺構
 - 1 井戸 101 (東から)
 - 2 1区全景 [江戸時代] (西から)
- 図版4 遺構
 - 1 2区全景 [室町時代から江戸時代初頭] (東から)
 - 2 2区全景 [江戸時代] (東から)
- 図版5 遺構
 - 1 建物2柱穴 380 (南から)
 - 2 建物2柱穴 412 (南から)
 - 3 建物2柱穴 433 (南から)
 - 4 建物2柱穴 450 (南から)
 - 5 柵4柱穴 388 (南から)
 - 6 柵4柱穴 438 (南から)
 - 7 柵5柱穴 463 (南から)
 - 8 柱穴 378 (東から)
- 図版6 遺物 出土土器
- 図版7 遺物 出土土器
- 図版8 遺物 出土土器・土製品・金属製品・銭貨
- 図版9 遺物 石製品・木製品
- 図版10 遺物 木製品

挿 図 目 次

図1	1区調査前全景 (北東から)	1
図2	1区作業風景 (西から)	1
図3	2区調査前全景 (東から)	1
図4	2区作業風景 (西から)	1
図5	体験学習風景 (北東から)	2
図6	調査区配置図 (1:1,000)	2
図7	調査区および周辺の調査位置図 (1:5,000)	3
図8	1区北壁断面図 (1:50)	7

図9	1区南壁断面図（1：50）	8
図10	1区遺構平面図〔室町時代後期から江戸時代初頭〕（1：150）	9
図11	建物1実測図（1：60）	10
図12	東門、柵1・2実測図（1：60）	11
図13	柵3実測図（1：60）	12
図14	井戸101実測図（1：40）	13
図15	堀210・211、溝3A・B、北拡張区北壁断面図（1：50）	14
図16	1区遺構平面図〔江戸時代〕（1：150）	16
図17	2区南壁・西壁断面図（1：50）	18
図18	2区遺構平面図〔室町時代から江戸時代初頭〕（1：100）	19
図19	建物2実測図（1：50）	20
図20	柵4・5実測図（1：50）	21
図21	2区遺構平面図〔江戸時代〕（1：100）	22
図22	土器実測図1〔古墳時代から平安時代〕（1：4）	24
図23	土器実測図2〔室町時代から江戸時代初頭〕（1：4）	25
図24	土器実測図3〔室町時代から江戸時代初頭〕（1：4）	26
図25	土器実測図4〔江戸時代〕（1：4）	28
図26	土器実測図5〔江戸時代〕（1：4）	30
図27	金属製品実測図（1：4）、銭貨拓影（2：3）	31
図28	石製品・土製品実測図（1：4、石1のみ1：2）	32
図29	木製品実測図1（1：4）	34
図30	木製品実測図2（1：4）	35
図31	堀210出土獣骨・貝類	36
図32	中世から江戸時代初頭遺構図（1：700）	38
図33	大藪城跡の現況	38

表 目 次

表1	周辺調査一覧表	4
表2	遺構概要表	6
表3	遺物概要表	23

大藪遺跡・大藪城跡

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯

今回の調査は、国道171号線と国道1号線を結ぶ都市計画道路（3・3・132 向日町上鳥羽線）整備事業に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査（その2）で、2010年4月から7月にかけて実施した発掘調査（その1）（図7・表1-15）に引き続く調査である。調査地は、京都市南区久世大藪町地内に所在し、弥生時代から平安時代にかけての集落遺跡である大藪遺跡および中世の居館跡として周知されている大藪城跡¹⁾の範囲内にあたる。

調査に先立ち、京都市建設局道路建設課、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）、財団法人京都市埋蔵文化財研究所で協議し、調査区の位置の確定、近隣住民への説明などの事前調整を実施した。



図1 1区調査前全景（北東から）



図2 1区作業風景（西から）



図3 2区調査前全景（東から）



図4 2区作業風景（西から）

(2) 調査の経過 (図1～6)

調査は2箇所の調査区に分け、東側の調査区を1区、西側の調査区を2区とした。1区は調査区を設定してから仮設フェンス設置し、隣接する耕作地のための排水溝掘削などの付帯工事を行った後、重機掘削を開始した。現地表面から0.4m前後まで掘削したところであらわれた黄褐色・灰黄色を主体とする土層上面を第1面とし、その後は手作業で掘削を行った。2区は仮設フェンス設置後、仮設道布設などの付帯工事を行った後、調査区を設定し重機掘削を行った。現地表面



図5 体験学習風景 (北東から)

から0.6m前後まで掘削したところであらわれた地山上面を第1面とし、その後は手作業で掘削を行った。1区、2区共に排土は搬出せずに調査敷地内で処理した。

調査中、文化財保護課の現地指導を適宜受けた。また、当研究所の検証委員臨検を受けた。他に普及啓発事業の一貫として星槎国際高校(東京都立川市)の先生と生徒10名を受け入れ、発掘調査の体験学習を行った。

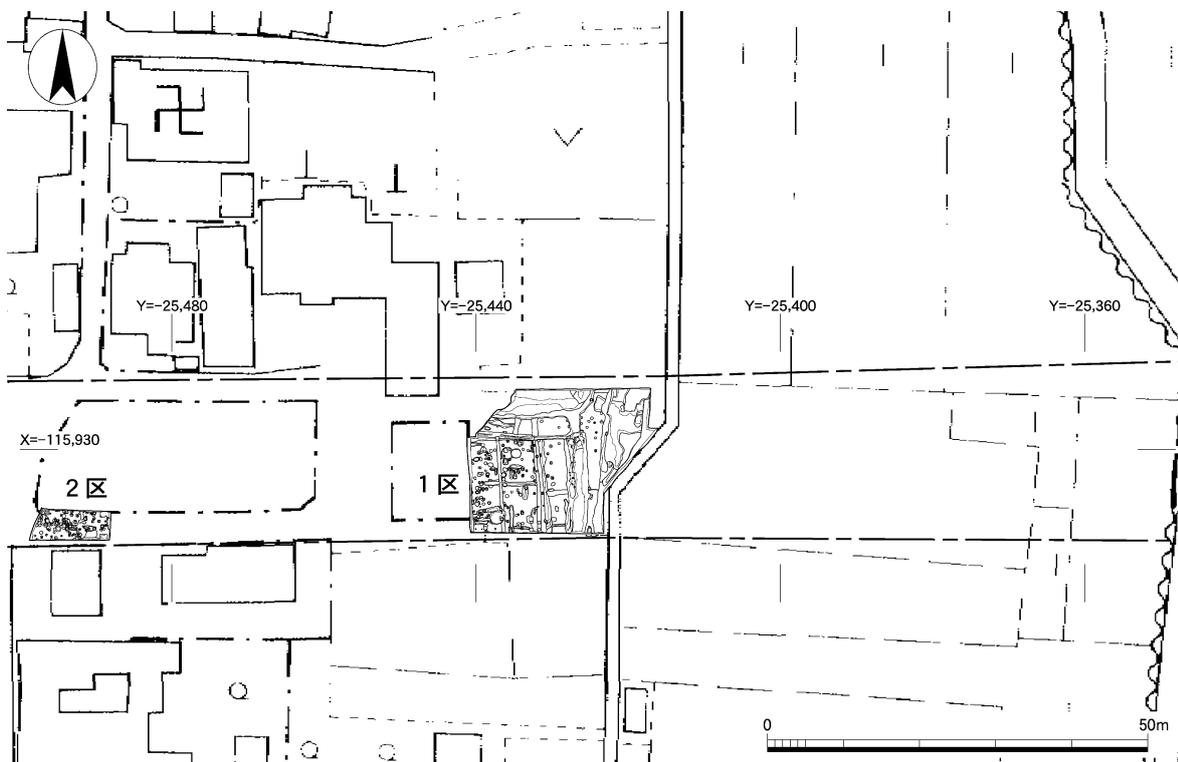


図6 調査区配置図 (1:1,000)

2. 位置と環境

(1) 位置と環境

調査地は、京都市の南西部にあたり、国道171号線の東約400mの大藪集落内に位置し、西を向日丘陵、東を桂川に挟まれた、桂川の後背湿地から微高地に移る地点に立地し、地形分類図によれば、谷底平野・氾濫平野²⁾に分類される。大藪遺跡・大藪城跡の両遺跡の東限近くにあたっている。大藪の集落は、中央を南北に縦断する古くからの道路である大藪街道に沿って営まれた南北に細長い集落である。この大藪街道は、北は大藪町地内で旧西国街道に接続し、南は府道伏見向日線の幹線道路と接続している。

大藪の名は、暦応三年(1340)の上久世荘絵図に「本久世 大ヤフ」と記されているのが史料

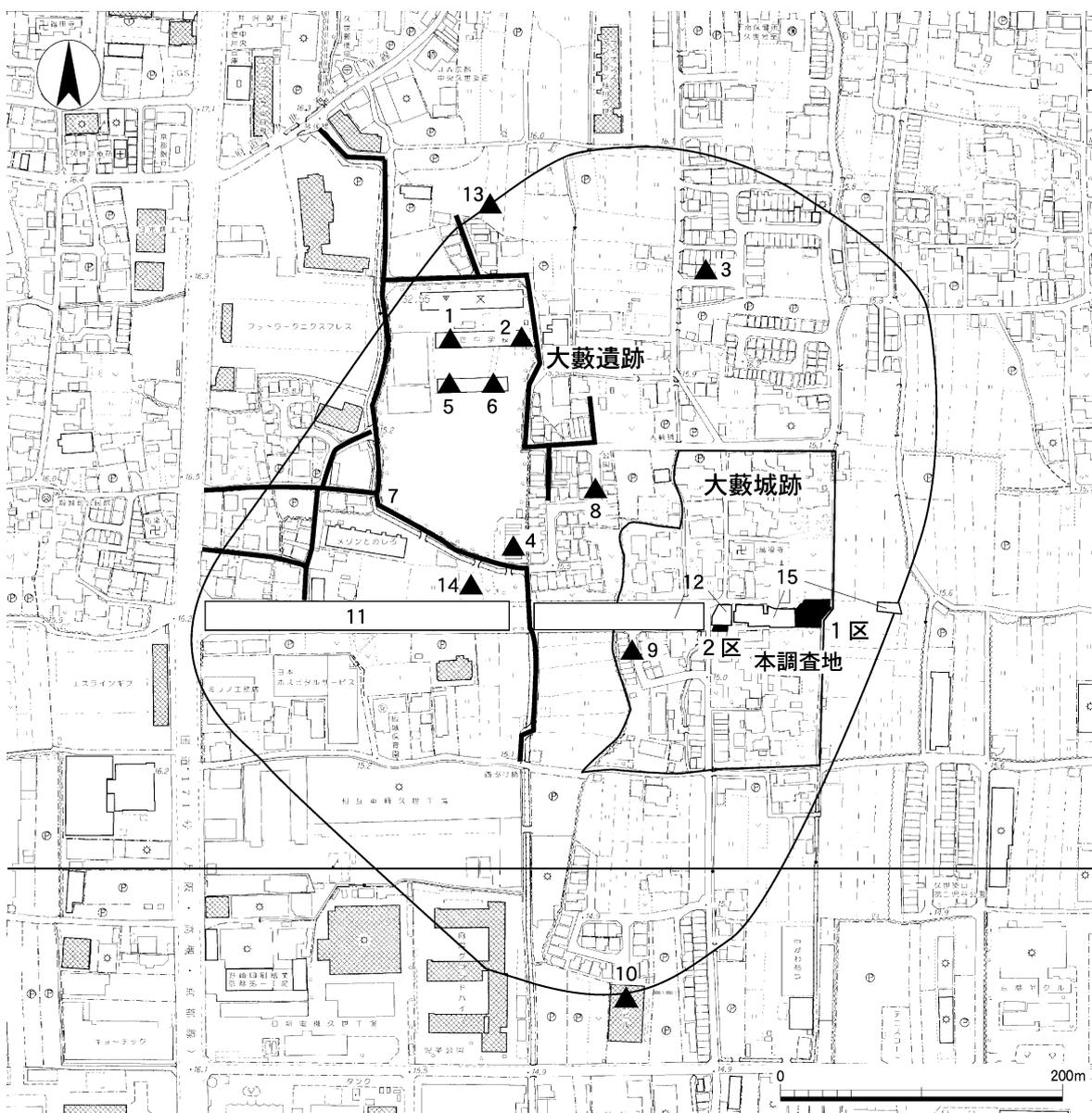


図7 調査区および周辺の調査位置図 (1 : 5,000)

表1 周辺調査一覧表

No.	調査種類 面積 (m ²)	調査期間	主な遺構	主な遺物	文献
1	発掘 100	1972.07.31 ～08.24	弥生～鎌倉：北西から南東方向の溝状流れ、杭列。奈良～長岡：祭祀遺構。	弥生中期～後期：弥生土器。古墳前期：土師器。中期：須恵器。奈良～長岡：土師器、須恵器、木製品、土馬、人面土器、馬の歯・骨など。平安：土器類、瓦。鎌倉：土器類。	梅川光隆『大敷遺跡発掘調査報告』六勝寺研究会 1972
2	発掘 130	1979.07.31 ～08.20	弥生：ピットおよび溝状の遺構。中世：溝5条。	弥生：弥生土器。	未報告
3	発掘 520	1980.12.04 ～1981.01.20	弥生：川1条、杭1基。長岡：溝3条。鎌倉：建物5棟以上(柱跡は約500基)、溝6条、井戸19基、土坑4基。	弥生：弥生土器、木製品、石包丁、石剣、石匙。古墳：土器類、木製品、有孔円板。長岡：土器類。平安：土器類。鎌倉：土器類、瓦。江戸：土器類。	未報告
4	発掘 180	1981.08.11 ～08.19	弥生～古墳：流路か。長岡：遺物包含層。	弥生～古墳：弥生土器、土師器、自然木。長岡：土師器、須恵器、瓦。	磯部 勝「大敷遺跡」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』
5	発掘 341	1983.07.11 ～10.05	奈良～平安中期か：流路および流路に伴う杭列(杭列は奈良時代と推定)。	縄文：縄文土器。弥生後期：弥生土器。古墳：土師器、須恵器、管玉。奈良：土師器、須恵器、土製品。平安：土器類多数、人面土器、竈、瓦。鎌倉～室町：土器類多数、木製品。	堀内明博・鈴木廣司「大敷遺跡」『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
6	発掘 157.5	1985.05.07 ～06.14	時期不明：流路、それに伴う杭列、土坑1基。	弥生：弥生土器。平安：土器類、墨書土器「浄」(須恵器)、瓦、木製品(人形・削りかけ・曲物)。中世：土器類。	上村和直・久世康博「大敷遺跡」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
7	立会 1335.5	1986.12.10 ～1987.07.21	弥生：土坑、溝、自然流路。古墳：自然流路。奈良：自然流路、杭列。長岡：溝。平安：土坑、溝、自然流路。鎌倉～室町以降：柱穴、土坑、溝(条里)。	弥生：弥生土器、木製品(盤・栓)。古墳：土師器、須恵器。奈良：土師器、須恵器、製塩土器、木杭。平安：土器類多数、瓦、木製品(曲物底部)。鎌倉～室町以降：土器類多数、木製品(下駄)。	吉崎 伸「大敷遺跡・中久世遺跡」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
8	発掘 485	1987.05.25 ～06.27	弥生後期：竪穴住居。奈良：自然流路、護岸施設。鎌倉～室町：濠、小溝、土坑。	弥生：弥生土器、石製品、柱根。古墳：土師器、須恵器。奈良：土師器、須恵器、黒色土器、木製品、杭。鎌倉：土器類、木製品(漆器)。室町：土器類。	鈴木廣司「大敷遺跡」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
9	発掘 172	1988.10.29 ～12.01	鎌倉～江戸前期：掘立柱建物3棟、井戸3基、土坑、溝、柱穴。江戸中期：柱跡(柱穴・根石・礎石)、土坑、溝。	鎌倉：土器類。室町：土器類、金属製品(包丁)。桃山～江戸：土器類、金属製品(キセル)。	吉崎 伸「大敷遺跡」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
10	発掘 980	1990.01.05 ～03.23	弥生後期：竪穴住居4棟、方形周溝墓、土坑、濠、溝、湿地状落込。古墳前期：竪穴住居。古墳前期～中期：掘立柱建物、土壙墓、土坑、溝、小柱穴。長岡：総柱建物(倉庫)、掘立柱建物、柵列。鎌倉～室町：土坑、暗渠溝。江戸：土壙墓、土坑、暗渠溝。	弥生：弥生土器、勾玉。古墳：土師器、須恵器、管玉。長岡：土師器、須恵器。鎌倉～室町：土器類多数。江戸：土器類。	鈴木廣司「長岡京京一条三坊・大敷遺跡」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
11	発掘 3925	1997.12.08 ～1999.04.15	弥生後期：竪穴住居、方形周溝墓、溝。長岡：掘立柱建物、井戸、柵、溝。平安後期：井戸、溝。室町：礎石建物、掘立柱建物、井戸、堀、溝、土坑、河川。江戸：井戸、溝、土坑。	弥生：弥生土器、石剣、石鏃、鋤、柱根、ガラス小玉。長岡：土師器、須恵器、瓦、木製品、獣骨。平安後期：土器類多数、曲物、折敷、漆器。江戸：土器類多数、位牌、下駄、曲物、漆器。	西大條 哲ほか「大敷遺跡」『平成10年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
12	発掘 1700	1999.07.06 ～2000.03.21	弥生後期：竪穴住居、柱穴。平安後期：土坑。鎌倉～室町：掘立柱建物、井戸、土坑、堀、溝。桃山～江戸：掘立柱建物、井戸、土坑、堀、溝。	縄文後期～晩期：縄文土器。弥生後期：弥生土器。古墳：土師器、須恵器。奈良(長岡)：土師器、須恵器、瓦。平安：土器類多数。鎌倉～室町：土器類多数、土製品、木製品、金属製品、石製品。桃山～江戸：土器類多数、土製品、木製品、石製品、銭貨。	吉崎 伸ほか「大敷遺跡」『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』
13	発掘 390	2006.11.16 ～12.08	弥生：方形周溝墓。平安：土坑、溝。室町以降：溝、建物。	弥生：弥生土器。平安：土器類。室町：土器類。	『中久世遺跡・大敷遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-19
14	発掘 295	2007.02.01 ～03.08	弥生後期：竪穴住居、溝、土坑、柱穴。平安後期：柱穴。鎌倉：柱穴。室町：建物、土坑、柱穴、溝、堀。江戸：溝。	弥生：弥生土器、石鏃、石剣、砥石、木製品(柱根)。平安：土器類。鎌倉：土器類。室町：土器類多数、瓦。江戸：土器類多数。	『大敷遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-32
15	発掘 760	2010.04.15 ～07.23	室町：建物、柵、井戸、柱穴、堀、溝。江戸：溝、柱穴	弥生：石鏃。室町～江戸初：土器類多数、瓦。江戸：土器類多数、木製品、金属製品、石製品。	『大敷遺跡・大敷城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-9

上の初出である³⁾。その後、在地の有力者によって大藪城が造営されたとするが、築造年代、存続期間など詳細は不明である⁴⁾。

(2) 周辺の調査 (図7・表1)

大藪遺跡・大藪城跡内で、実施された発掘調査・広域の立会調査は15箇所³⁾に及んでいる。そのうち大藪城跡の調査は3件ある。

1988年度に久世大藪町291番で宅地造成に伴って実施された調査(図7・表1-9)では、掘立柱建物3棟、柱穴、井戸3基、土坑、溝などが検出されている。また、近世になっても整地を繰り返しながら、集落が継続して営まれ現代に至っていることがわかった。土師器の皿、瓦器の椀・鍋・釜、焼締陶器の甕・播鉢、漆器椀、金属製品の包丁・銭貨などの遺物が出土している。

1999年度に街路建設工事に伴って実施された調査(図7・表1-12)では、東西4間×南北3間、東西6間×南北5間の2棟を含む掘立柱建物5棟、柱穴、柵、井戸、園池、溝、堀などが検出され、堀で区画された中に建物・井戸などが整然と配置されていることが明らかになった。調査地の西端で検出された南北方向の溝は、大藪城跡の西限の堀と考えられる。土師器の皿、瓦器の鍋・羽釜、漆器椀、木製品の下駄・柄杓・木球・箸・曲物、石製品の砥石、金属製品の小刀・銭貨・鎌、土製品の鏡の鋳型・羽口などの遺物が出土している。

2010年4月から7月に実施された3.3.132向日町上鳥羽線その1調査(図7・表1-15)では、南北1間×東西2間以上、南北1間×東西1間の掘立柱建物、柵、柱穴、土坑などの他に、1999年度調査で検出した区画溝と繋がる東西溝を検出している。土師器の皿、瓦器の鍋・羽釜などの遺物が出土している。限られた範囲での調査ではあるが、大藪城跡の実態・変遷を知る上での貴重な成果である。

3. 遺 構

(1) 遺構の概要 (表 2)

1区で検出した主な遺構は、室町時代後期から江戸時代初頭の掘立柱建物、柵、柱穴、堀、溝、土坑、井戸、江戸時代後期の耕作に伴う小溝、柱穴などがある。

2区で検出した遺構には、室町時代から江戸時代初頭の掘立柱建物、柵、柱穴、土坑、江戸時代後期の柱穴、溝などがある。

(2) 1区の遺構

1) 基本層序 (図 8・9)

1区の基本層序は、近世から現代にかけての耕作土層が0.3m前後、その下層は黄褐色・灰黄色を主体とする土層が0.1～0.15mの厚さでほぼ均一に堆積し、その下は地山となっている。

第1面の遺構は、黄褐色・灰黄色を主体とする整地土層上面で成立している。第2面の遺構は、地山層上面で成立している。第1面の標高は14.65m前後、第2面の標高は14.50m前後である。第1面の所属時期は江戸時代後期、第2面の所属時期は室町時代後期から江戸時代初頭と考えている。

2) 室町時代後期から江戸時代初頭の遺構 (図 10、図版 1)

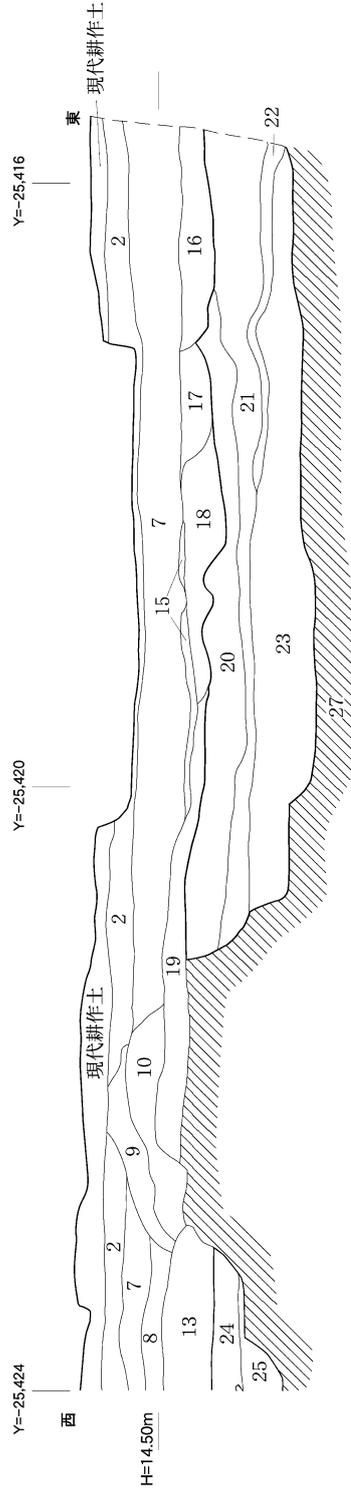
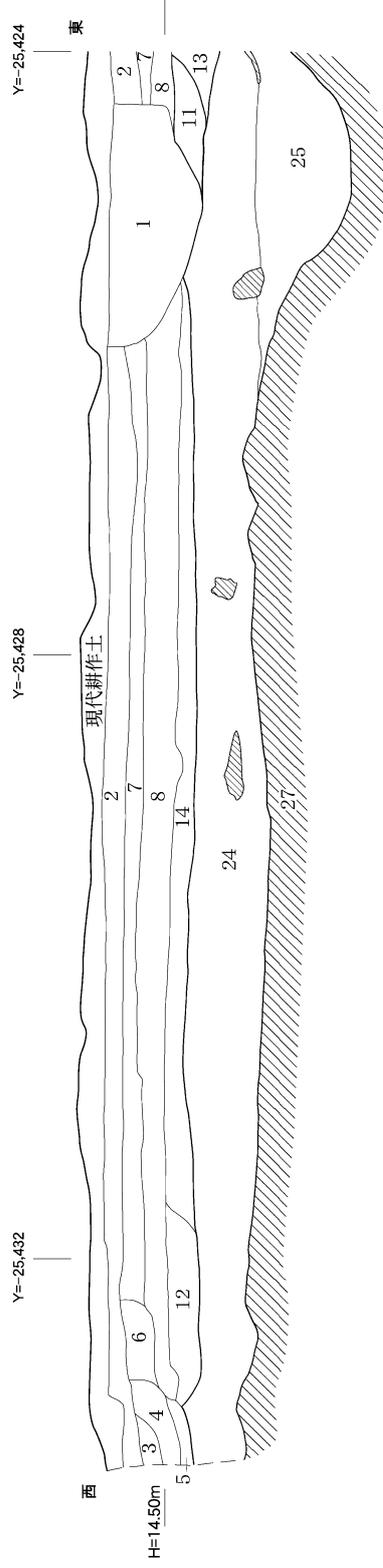
掘立柱建物、柵、井戸、堀、溝、土坑などを検出した。

建物 1 (図 11、図版 2) 調査区の西側で検出した柱穴列は、2010年度その 1 調査 1 区とあわせると、東西 2 間×南北 4 間の掘立柱建物であることが判明した。復元長は東西 6.8m×南北 8.0mとなる。柱穴の掘形は径 0.3～0.6mのものが大半であるが、0.8mを超えるものもある。柱間の距離は東西が 3.3～3.5mで、南北は約 2.0mである。他にも柱筋に並ぶ柱穴があることから、建物は補修あるいは建て替えられたものと考えられる。柱穴には根石が据えられているものがあり、土師器や瓦器などが出土した。

東門と柵 1～3 (図 12・13、図版 2) 建物 1 の南東角で門と門に取り付く柵を検出した。門

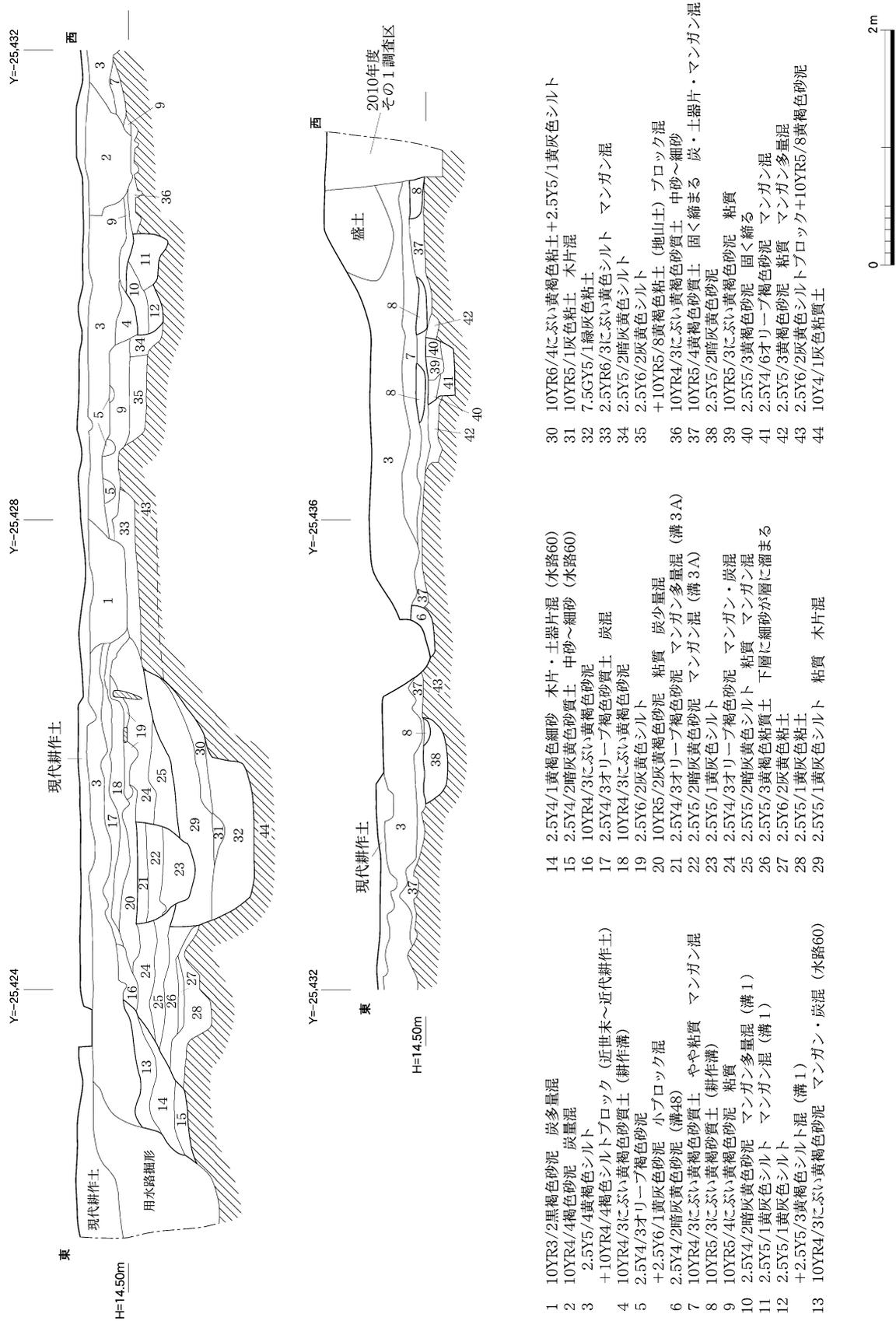
表 2 遺構概要表

時 代	遺 構	
	1 区	2 区
室町時代～ 江戸時代初頭	建物 1、東門、柵 1～3、井戸101、 柱穴126・295・297、堀210・211、 溝 3B・88、土坑213・232・298	建物 2、柵 4・5、 柱穴321・372・378・390・406
江戸時代	溝 1・3A・4・5・7・19・55、耕作溝群、 水路60、土坑45	柱穴群、溝332



- 1 10YR1.7/1黒色砂泥 土器・瓦・炭・焼土多量混
- 2 2.5Y5/4黄褐色シルト +10YR4/4褐色シルトブロック (近世末~近代耕作土)
- 3 10YR4/2暗黄褐色砂泥 (近代溝)
- 4 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 瓦・炭混 (近代溝)
- 5 2.5Y5/3黄褐色砂泥 粗砂混 (近代溝)
- 6 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 土器混 (近代溝)
- 7 2.5Y6/2暗黄褐色シルト マンガン多量混
- 8 10YR4/6褐色シルト +2.5Y5/2暗黄褐色シルト マンガン多量混
- 9 10YR4/6褐色シルト マンガン混 (畦畔)
- 10 2.5Y5/3黄褐色シルト (畦畔)
- 11 2.5Y5/3黄褐色シルト マンガン混
- 12 2.5Y5/2暗黄褐色粘質土 (溝5)
- 13 2.5Y5/4黄褐色砂泥 マンガン多量混 (整地土)
- 14 10YR6/4にぶい黄褐色シルト マンガン混 (整地土)
- 15 10YR4/4褐色シルト マンガン多量混
- 16 2.5Y5/3黄褐色シルト+7.5YR6/6褐色シルトブロック (整地土)
- 17 2.5Y5/2暗黄褐色シルト マンガン多量混 (整地土)
- 18 2.5Y6/2暗黄褐色砂泥 +10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロック マンガン多量混 (整地土)
- 19 10YR5/2暗黄褐色砂泥+10YR4/4褐色シルトブロック (整地土)
- 20 2.5Y5/1黄灰色粘質土+10YR5/4にぶい黄褐色砂泥ブロック (堀210)
- 21 7.5Y5/1灰色粘質土 下層に中砂~粗砂堆積 (堀210)
- 22 7.5Y5/1灰色砂泥 (堀210)
- 23 10YR4/1灰色粘質土+5GY5/1オリーブ灰褐色シルトブロック (堀210)
- 24 2.5Y6/2暗黄褐色シルト 土器・マンガン混 (堀211)
- 25 10YR5/1灰色粘土 木片混 (堀211)
- 26 2.5Y4/1黄灰色粘土 木片混 (堀211)
- 27 7.5GY5/1 緑灰色粘土 (地山)

図8 1区北壁断面図 (1:50)



- | | | | | | |
|----|-------------------------------|----|-------------------------------|----|---------------------------------|
| 1 | 10YR3/2黒褐色砂泥 炭多量混 | 14 | 2.5Y4/1黄褐色細砂 木片・土器片混 (水路60) | 30 | 10YR6/4にぶい黄褐色粘土+2.5Y5/1黄灰色シルト |
| 2 | 10YR4/4褐色砂泥 炭量混 | 15 | 2.5Y4/2暗灰黄色砂質土 中砂～細砂 (水路60) | 31 | 10YR5/1灰色粘土 木片混 |
| 3 | 2.5Y5/4黄褐色シルト | 16 | 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 | 32 | 7.5GY5/1緑灰色粘土 |
| 4 | +10YR4/4褐色シルトブロック (近世末～近代耕作土) | 17 | 2.5Y4/3オリーブ褐色砂質土 炭混 | 33 | 2.5YR6/3にぶい黄色シルト マンガン混 |
| 5 | 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (耕作溝) | 18 | 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 | 34 | 2.5Y5/2暗灰黄色シルト |
| 6 | 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 | 19 | 2.5Y6/2灰黄色シルト | 35 | 2.5Y6/2暗灰黄色シルト |
| 7 | +2.5Y6/1黄灰色砂泥 小ブロック混 | 20 | 10YR5/2灰黄褐色砂泥 粘質 炭少量混 | 36 | +10YR5/8黄褐色粘土 (地山土) ブロック混 |
| 8 | 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 (溝48) | 21 | 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 マンガン多量混 (溝3A) | 37 | 10YR4/3にぶい黄褐色砂質土 中砂～細砂 |
| 9 | 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 (耕作溝) | 22 | 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥 マンガン混 (溝3A) | 38 | 10YR5/4黄褐色砂質土 固く締まる 炭・土器片・マンガン混 |
| 10 | 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥 粘質 | 23 | 2.5Y5/1黄灰色シルト | 39 | 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥 |
| 11 | 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥 マンガン多量混 (溝1) | 24 | 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥 マンガン・炭混 | 40 | 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥 粘質 |
| 12 | 2.5Y5/1黄灰色シルト マンガン混 (溝1) | 25 | 2.5Y5/2暗灰黄色シルト 粘質 マンガン混 | 41 | 2.5Y4/6オリーブ褐色砂泥 マンガン混 |
| 13 | +2.5Y5/3黄褐色シルト混 (溝1) | 26 | 2.5Y5/3黄褐色砂質土 下層に細砂が層に溜まる | 42 | 2.5Y5/3黄褐色砂泥 粘質 マンガン多量混 |
| | | 27 | 2.5Y6/2灰黄色粘土 | 43 | 2.5Y6/2灰黄色シルトブロック+10YR5/8黄褐色砂泥 |
| | | 28 | 2.5Y5/1黄灰色粘土 | 44 | 10Y4/1灰色粘質土 |
| | | 29 | 2.5Y5/1黄灰色シルト 粘質 木片混 | | |

図9 1区1段断面図 (1:50)

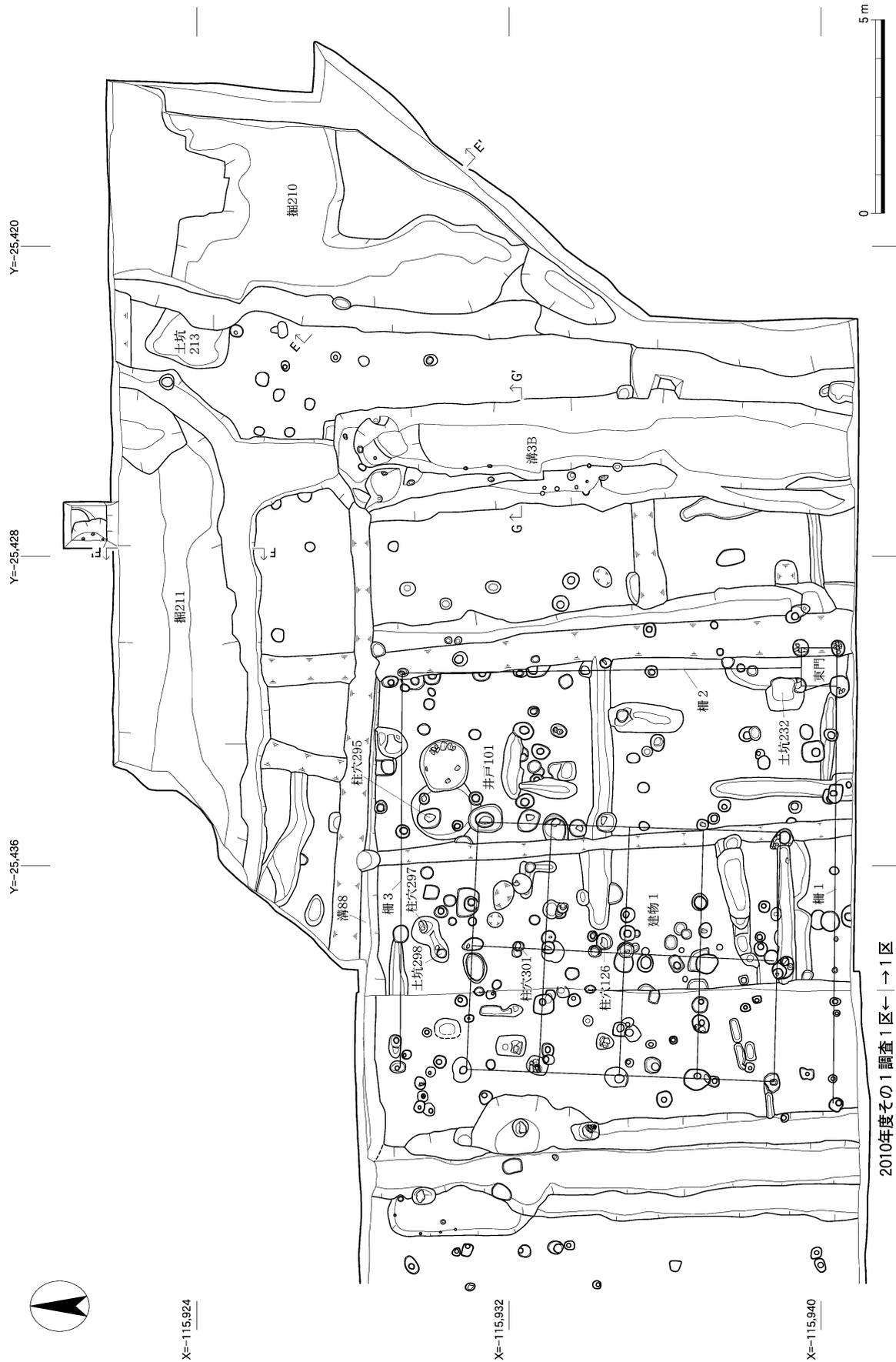
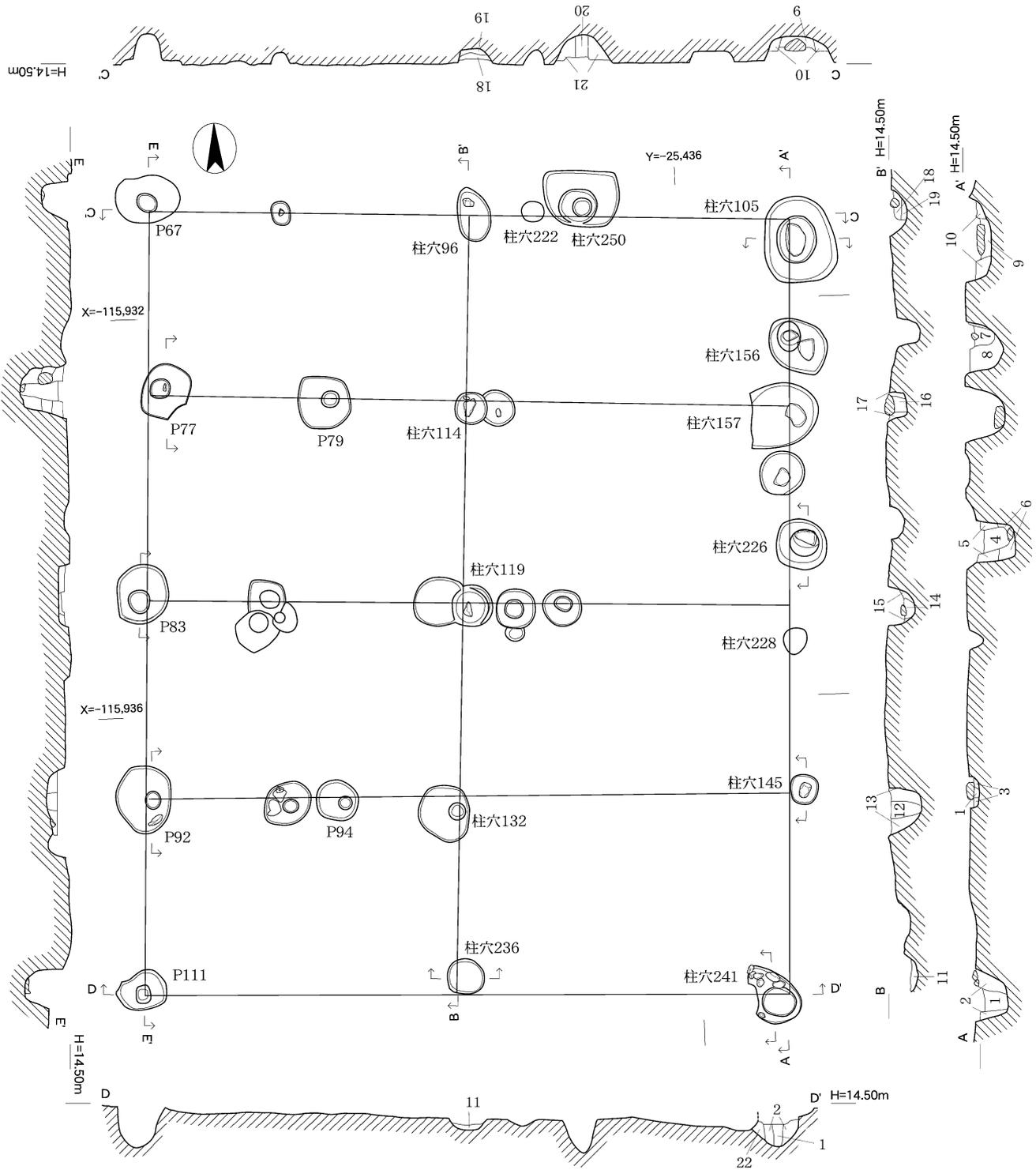


図 10 1区遺構平面図 [室町時代後期から江戸時代初頭] (1:150)



- | | |
|--|---|
| 1 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥 | 12 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥+2.5Y5/2暗灰黄色粘質ブロック マンガン多 |
| 2 2.5Y5/3黄褐色砂泥 炭混 | 13 2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土+2.5Y5/2暗灰黄色粘質土ブロック |
| 3 5Y5/2灰オリーブ砂泥 マンガン多量混 | マンガン多量混 |
| 4 2.5Y6/2灰黄色砂泥+2.5Y5/2暗灰黄色粘質土 マンガン多量混 | 14 2.5Y5/4黄褐色砂泥 炭少量混 |
| 5 2.5Y5/3黄褐色砂泥+2.5Y5/2暗灰黄色砂泥ブロック | 15 2.5Y5/4黄褐色砂泥+10YR5/6黄褐色シルト 炭少量混 |
| 土師片少量マンガン多量混 | 16 2.5Y5/2暗灰黄色粘質土 マンガン多量混 |
| 6 7.5YR4/4褐色砂泥+2.5Y5/2暗灰黄色粘質土 | 17 2.5Y5/1黄灰色粘質土 マンガン多量混 |
| 7 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥+10YR5/2灰黄褐色砂泥ブロック | 18 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥+10YR5/2灰黄褐色砂泥ブロック 土師片少量混 |
| 土師片少量マンガン混 | 19 10YR5/8黄褐色粘質土+2.5Y5/2暗灰黄色粘質土ブロック |
| 8 10YR5/6黄褐色砂泥+2.5Y5/2暗灰黄色砂泥ブロック | 20 10YR4/4褐色砂泥+5Y4/1灰色砂泥ブロック マンガン多量混 |
| 9 10YR5/6黄褐色砂泥+2.5Y6/2灰黄色砂泥ブロック | 21 2.5Y4/6オリーブ褐色砂泥+5Y5/2灰オリーブ粘質土ブロック |
| 10 10YR4/6褐色砂泥+2.5Y6/2灰黄色砂泥 炭少量混 | 土師片少量マンガン多量混 |
| 11 10YR5/4にぶい黄褐色粘質土+2.5Y5/2暗灰黄色粘質土 マンガン混 | 22 2.5Y6/2灰黄色砂泥 |



図 11 建物 1 実測図 (1 : 60)

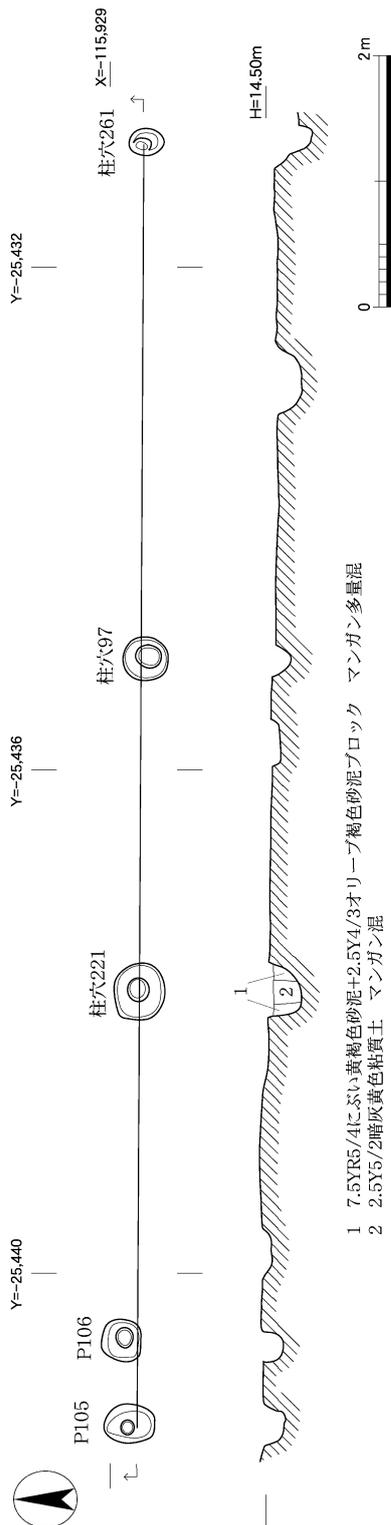


図13 柵3実測図 (1:60)

は東に開き、柵は建物の北・東・南側の3箇所を巡る。柱穴掘形は0.2～0.4mのものが大半で、門の柱穴には根石が据えられている。門・柵の柱穴からは土師器、瓦器などが出土している。

柱穴126 調査区西端部中央で検出した。長径0.42m、短径0.4m、深さ0.5mである。掘形底には根石が据えられている。埋土から土師器、須恵器が出土した。須恵器は混入である。

柱穴295 (図版2) 調査区西半部やや北寄り、井戸101の西で検出した。長径0.6m、短径0.5m、深さ0.2mである。掘形底には根石が据えられている。

柱穴297 (図版2) 調査区西半部やや北寄りで検出した。長径0.76m、短径0.52m、深さ0.6mである。根石が2段に重ねられている。埋土から土師器、瓦器が出土した。

井戸101 (図14、図版3) 調査区の西半部やや北側で検出した石組みの井戸である。掘形は長径1.34m、短径1.24mの胴張りの隅丸方形である。検出面からの深さは1.7mである。井筒は上から下へ窄まっている。井筒を形成している石材は、上半部では10cm前後、下半部は20～30cmの大きさのものが使われている。井筒底には底を抜いた桶を据え、水溜としている。水溜の径は長径0.36m、短径0.3mである。土圧により一部変形している。掘形埋土は大きく2層に分けられる。上層は黄褐色砂泥、下層はオリーブ灰色泥砂である。井筒内の埋土は大きく3層に分けられる。上層は暗灰黄色砂泥、中層は褐色砂泥+暗灰黄色砂泥ブロック、下層は暗灰黄色シルトである。井筒内からは、土師器、焼締陶器などが出土した。井戸の周辺に柱穴を4個検出した。井戸に付属する覆屋があったものと考えている。

堀210 (図15) 調査区の東端で検出した南北方向の溝である。幅5.6m以上、深さ0.7～1.2mで、北から南への傾斜がみられることから、水は南へ向かって流れていたとみられる。東肩は調査区外となり、確認できなかった。埋土は大きく2層に分けることができる。上層は黄灰色を中心としたシルト層、下層は灰色を中心としたシルト層にそれらの間に砂礫層が挟まる。埋土中からは土師器、瓦器、焼締陶器、輸入白磁などが出土したが、

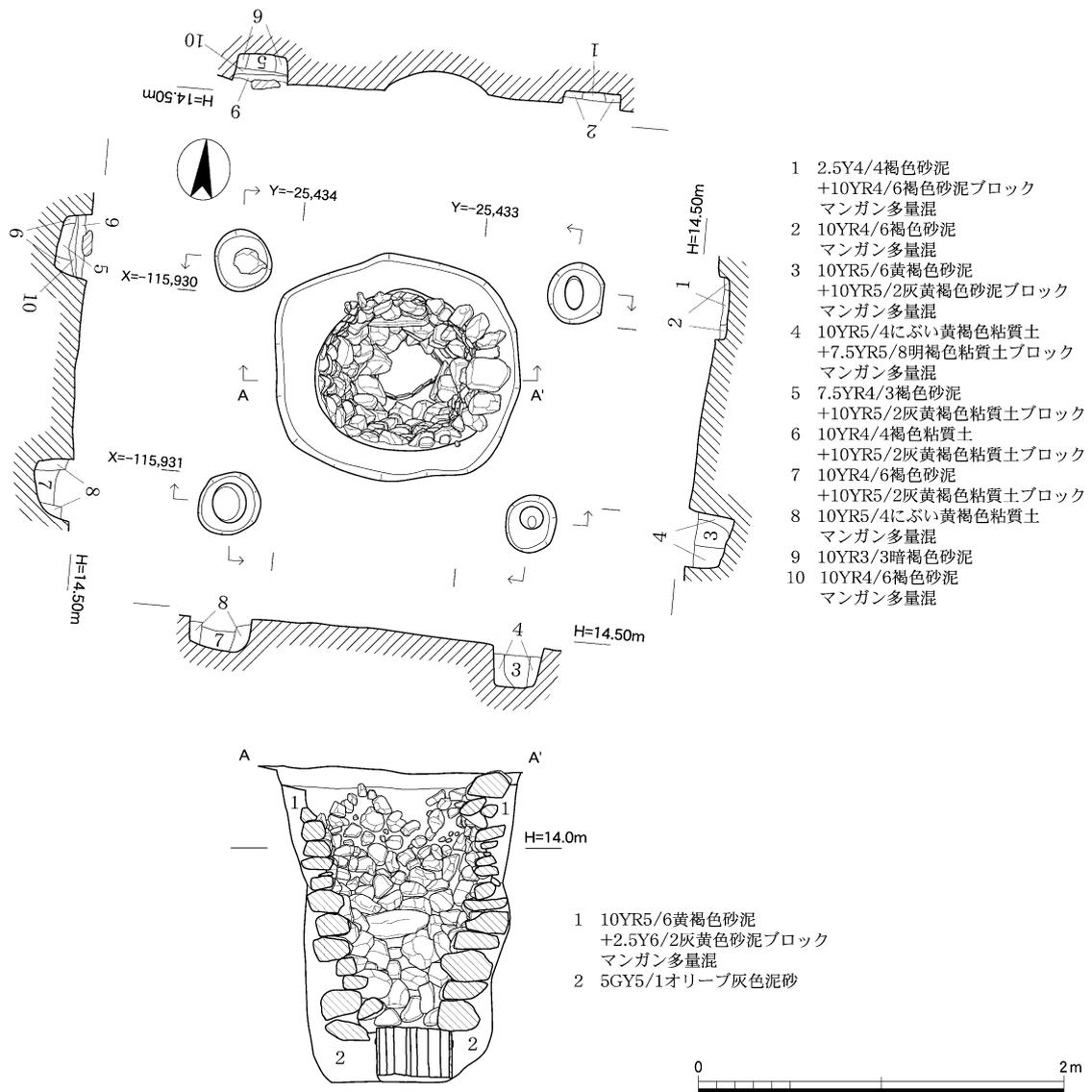


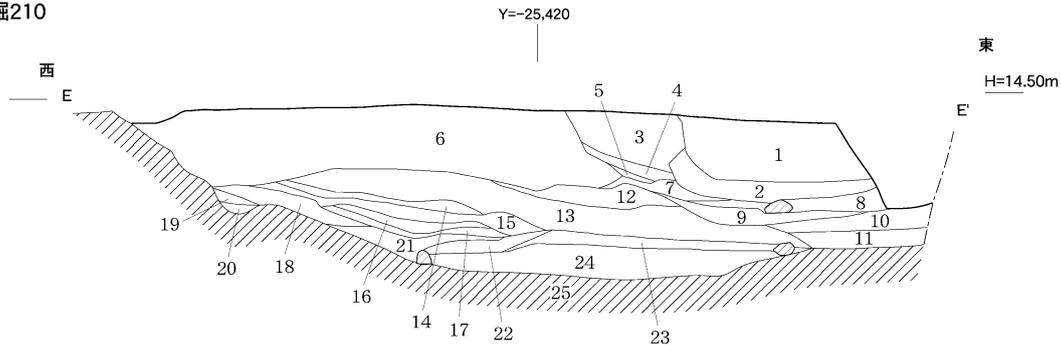
図 14 井戸 101 実測図 (1 : 40)

その量は少ない。最下層からは動物の骨や貝殻なども出土した。

堀 211 (図 15) 調査区の北端で検出した東西方向の溝である。幅 3.9 m 以上、深さ 0.7 m 前後である。堀の底部は 2 段に落ちている。堀の北肩を確認するため調査区の北側を一部拡張したところ、南肩と同様に底部は 2 段に落ちていることが判明した。この堀は、西から東に向かって流れるものとみられるが、堀 210 には直結せず、その手前で北に方向を変えている。方向が変わる溝底の状況は、南から北へ向かって深くなっている。北から南へ低くなる周辺の地形にかかわらず、南から北へ流れるようにしている。埋土は 2 層に分けられ、上層は灰黄色を中心とした砂泥層、下層は灰色を中心とした粘土層となっている。この堀は、近世でも利用されたものとみられ、近世の土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、砥石・白の石製品の他に染付、土師質土器の焙烙、木製品などが出土している。

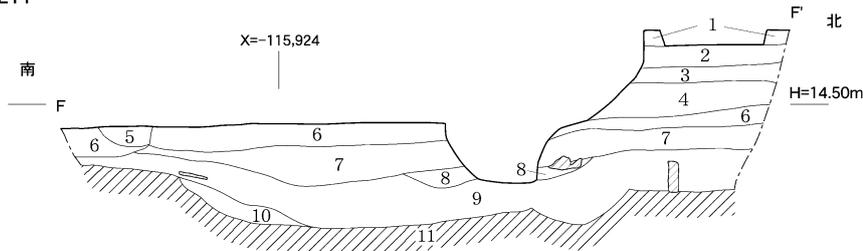
溝 3B (図 15) 調査区の中央部で検出した南北方向の溝である。幅 2.5 ~ 3 m、深さ 0.8 ~ 1 m である。この溝は、堀 211 が北へ方向を変える辺りで繋がる。また、両者が接続する辺りの幅

堀210



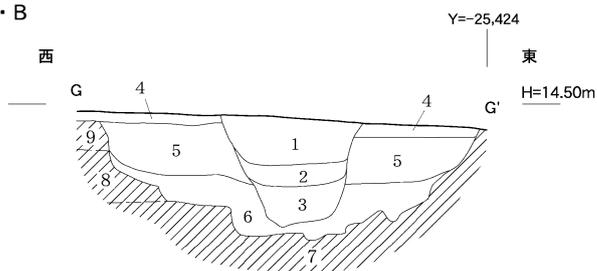
- | | |
|--|--|
| 1 2.5Y黄灰色シルト 炭片木片多量混 (水路60) | 14 2.5Y5/1黄灰色砂泥 マンガン多量混 |
| 2 10YR4/1褐灰色シルト+2.5Y4/3オリーブ褐色細砂の互層 | 15 5Y4/1灰色粘質土 |
| 3 2.5Y4/1黄灰色シルト | 16 10Y4/1灰色粘質土+7.5Y4/2灰オリーブ色微砂 炭片混 |
| 4 2.5Y5/1黄灰色シルト | 17 10Y5/1灰色粘質土 |
| 5 2.5Y4/2暗灰黄色シルト | 18 7.5Y5/1灰色粘質土 |
| 6 5Y5/1灰色シルト マンガン多量混 | 19 5Y5/2灰オリーブ色粘質土 |
| 7 7.5Y5/1灰色シルト 木片混 | 20 5Y4/2灰オリーブ色シルト |
| 8 2.5Y4/3オリーブ褐色砂礫 染付片 φ0.5~1cmの礫多量混 | 21 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘質土 木片混 |
| 9 10Y5/1灰色粘質土 | 22 5GY5/1オリーブ灰色粘質土+7.5GY4/1暗緑灰色粘質土ブロック 木片混 |
| 10 2.5GY3/1暗オリーブ灰色砂泥+2.5Y4/2暗灰黄色砂泥ブロック | 23 7.5Y4/2灰オリーブ砂礫 φ0.5~2cmの礫多量混 |
| 11 2.5Y4/1暗オリーブ灰色砂泥 木片混 | 24 10Y4/1灰色粘質土+5GY5/1オリーブ灰色シルトブロック 木片混 |
| 12 5GY5/1オリーブ灰色粘質土 | 25 10Y5/1灰色粘土 (地山) |
| 13 7.5Y5/1灰色粘質土 下層砂粒より大 | |

堀211



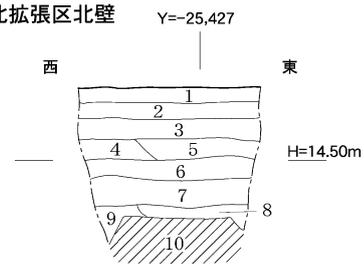
- | | |
|--|----------------------------------|
| 1 オリーブ褐色シルト | 6 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥粘質 マンガン多量混 (堀211) |
| 2 2.5Y6/2灰黄色シルト マンガン多量混 (旧耕作土) | 7 10YR5/2灰黄褐色砂泥粘質 木片混 (堀211) |
| 3 2.5Y5/4黄灰色シルト+10YR4/4褐色シルトブロック (近世~近世末耕作土) | 8 10YR2/2灰黄褐色砂泥粘質 木片混 (堀211) |
| 4 10YR4/6褐色シルト+2.5Y5/2暗灰黄色シルト マンガン多量混 | 9 2.5Y5/1灰色粘土 木片混 (堀211) |
| 5 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥 (溝7) | 10 10GY5/1緑灰色粘土 木片混 (堀211) |
| | 11 7.5GY5/1 緑灰色粘土 (地山) |

溝3A・B



- | |
|--|
| 1 10YR3/2黒褐色砂泥+10YR5/2灰黄褐色砂泥ブロック 土師片混 (溝3A) |
| 2 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥 炭少量混 (溝3A) |
| 3 2.5Y5/2暗灰黄色粘質土 (溝3A) |
| 4 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥+10YR5/2灰黄褐色砂泥ブロック マンガン混 (溝3B) |
| 5 10YR4/4褐色砂泥+10YR5/2灰黄褐色砂泥ブロック 土師片少量マンガン多量混 (溝3B) |
| 6 2.5Y4/1黄灰色シルト 木片混 (溝3B) |
| 7 2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土 (地山) |
| 8 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥+2.5Y5/2暗灰黄色砂泥ブロック マンガン多量混 (地山) |
| 9 2.5Y6/2灰黄色シルトブロック+10YR5/8黄褐色砂泥 (地山) |

北拡張区北壁



- | |
|--|
| 1 オリーブ褐色シルト |
| 2 2.5Y6/2灰黄色シルト マンガン多量混 (旧耕作土) |
| 3 2.5Y5/4黄灰色シルト+10YR4/4褐色シルトブロック (近世~近世末耕作土) |
| 4 10YR4/6褐色シルト+2.5Y5/2暗灰黄色シルト マンガン多量混 |
| 5 2.5Y6/3にぶい黄色シルト |
| 6 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥 |
| 7 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥粘質粘質 マンガン多量混 |
| 8 2.5Y5/2暗灰黄色砂泥粘質 |
| 9 2.5Y5/1黄灰色粘土 木片混 |
| 10 7.5GY5/1 緑灰色粘土 (地山) |



図15 堀210・211、溝3A・B、北拡張区北壁断面図 (1:50)

は 0.5 m 前後と狭くなり、深さは 0.3 m 前後と浅くなっている。埋土は大きく 3 層に分かれる。上層はにぶい黄褐色砂泥、中層は褐色砂泥、下層は暗オリーブ灰色泥土である。下層ほど砂粒は細かくなっていることから、水は北から南へ流れるものとみられるが、流れは緩やかであったか溜っていた状態にあったものと考えられる。埋土からは土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、銭貨などが出土している。

溝 88 調査区の北半部で南肩を検出した東西方向の溝である。幅 0.6 m 以上、深さ 0.26 m である。溝の東側は当初、溝 3 B に合流していたものと考えられるが、後世の遺構によって削られ、接続箇所は検出できなかった。埋土は暗灰黄色シルトに褐色シルトが混じっている。埋土中から土師器、瓦器、焼締陶器などが出土した。

土坑 213 調査区北部東端で検出した土坑である。長径 1.95 m、短径残存長 1.05 m、深さ 0.4 m である。土坑の東半は堀 210 で削られていた。埋土中から土師器、瓦器碗、輸入青白磁、瓦、銅製品などが出土した。

土坑 232 調査区西半部南端で検出した。長径 0.96 m、短径 0.85 m、深さ 0.28 m である。黄褐色砂泥の埋土から土師器、須恵器などが出土した。

土坑 298 調査区北半部西端で検出した。長径 0.61 m、短径 0.45 m、深さ 0.47 m である。暗灰黄色砂泥の埋土から土師器が出土した。

3) 江戸時代の遺構 (図 16、図版 3)

溝、耕作に伴う小溝群、水路、土坑などを検出した。

溝 1 調査区中央部で検出した東西および南北方向の T 字を呈する溝である。幅 0.6 ~ 0.8 m、深さ 0.1 ~ 0.2 m あり、西部では X=-115,924 付近で東西溝の幅が拡がり、調査区外へと展開する。この溝が作られた当初は幅が広がった東西溝であるが、後に、溝幅を狭めて南北溝の西側に礫を並べて肩としたものと考えられる。暗灰黄色砂泥の埋土から土師器、染付、施釉陶器、焼締陶器、平瓦、土師質土器の焙烙などが出土した。

溝 3 A 調査区中央部やや東で検出した南北方向の溝である。幅 0.5 ~ 1.0 m、深さ 0.1 ~ 0.5 m である。溝の北端は、溝 1 に削られている。黒褐色砂泥の埋土から土師器、施釉陶器、焼締陶器、染付、瓦などの他に砥石などの石製品、土師質土器の焙烙、人形などの土製品が出土した。

溝 4 調査区北半部で検出した東西方向の溝である。東端で溝 3 A と接している。幅 0.3 ~ 0.6 m、深さ 0.3 m 前後である。灰黄色砂泥の埋土から土師器、染付、施釉陶器、焼締陶器、瓦などが出土した。

溝 5 調査区北西部で検出した南北方向の溝である。南部で溝 4 と接し、北部は幅を拡げて調査区外に延長する。溝 1 に削られる。幅 0.6 ~ 0.7 m、深さ 0.2 m 前後である。黄灰色砂泥の埋土から土師器、染付、施釉陶器、焼締陶器、瓦などの他に土師質土器の焙烙が出土した。

溝 7 調査区北半部西半で検出した溝である。幅 0.2 m、深さ 0.13 m である。東西方向の溝であるが、溝の西端は溝 1 に接し、東端は方向を南に変え収束している。暗灰色砂泥の埋土から銭

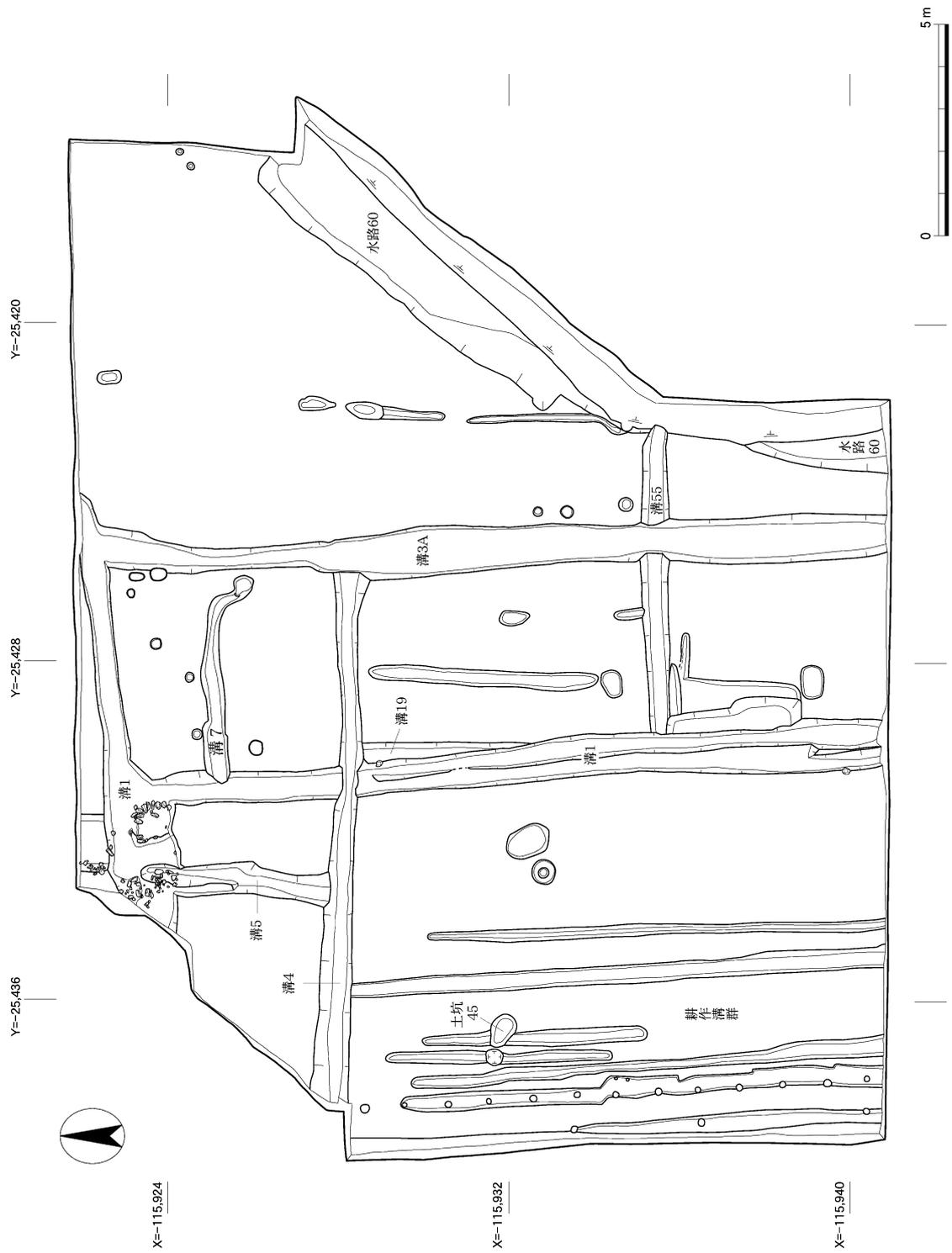


図16 1区遺構平面図 [江戸時代] (1:150)

貨が出土した。

溝 19 調査区北半部、中央やや西寄りで検出した。幅 0.5 m 前後、深さ 0.2 m 前後である。北は溝 4、南は溝 1 に削られている。暗灰黄色砂泥の埋土から土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器の他に銭貨が出土した。

溝 55 調査区南東部で検出した。東西方向の溝の西部は溝 1 と、中央部を溝 3 A に削られ、東部は水路 60 と接している。幅 0.6 m 前後、深さ 0.1 m 前後である。灰黄褐色砂泥の埋土から土師器、染付、施釉陶器、焼締陶器などの他に土師質土器の焙烙、人形などの土製品が出土した。

耕作溝群 調査区西端部では南北方向の小溝群を検出した。幅 0.3 ～ 0.5 m、深さ 4 cm 前後である。埋土は黄灰色砂泥、黒褐色砂泥などである。いずれも耕作に伴うものとみられる。これらの小溝は、溝 1 から東は少なくなる傾向がみられ、さらに溝 3 から東はほとんどみられなくなっている。

水路 60 調査区東端で検出した。幅 1.5 m 以上、深さ 0.4 m 前後である。水路の東肩は、現在の大藪水路擁壁の掘形で削られていた。平面形は「く」の字状を呈している。19 世紀頃に埋められたと考えられる。現在みられる大藪水路の形状と位置はほぼ同じであるところから、現在の大藪水路は水路 60 を踏襲しているものと思われる。黄灰色シルトの埋土から土師器、染付などの磁器、施釉陶器、焼締陶器、瓦などの他に鎌・煙管などの金属製品、硯・臼などの石製品、漆器椀などの木製品、土師質土器の焙烙、人形などの土製品などが出土した。

土坑 45 調査区西部で検出した土坑である。耕作溝を切る状態で検出した。長径 0.83 m、短径 0.55 m、深さ 0.35 m である。埋土から土師器、焼締陶器、瓦、鉄製品などが出土した。

(3) 2 区の遺構

1) 基本層序 (図 17)

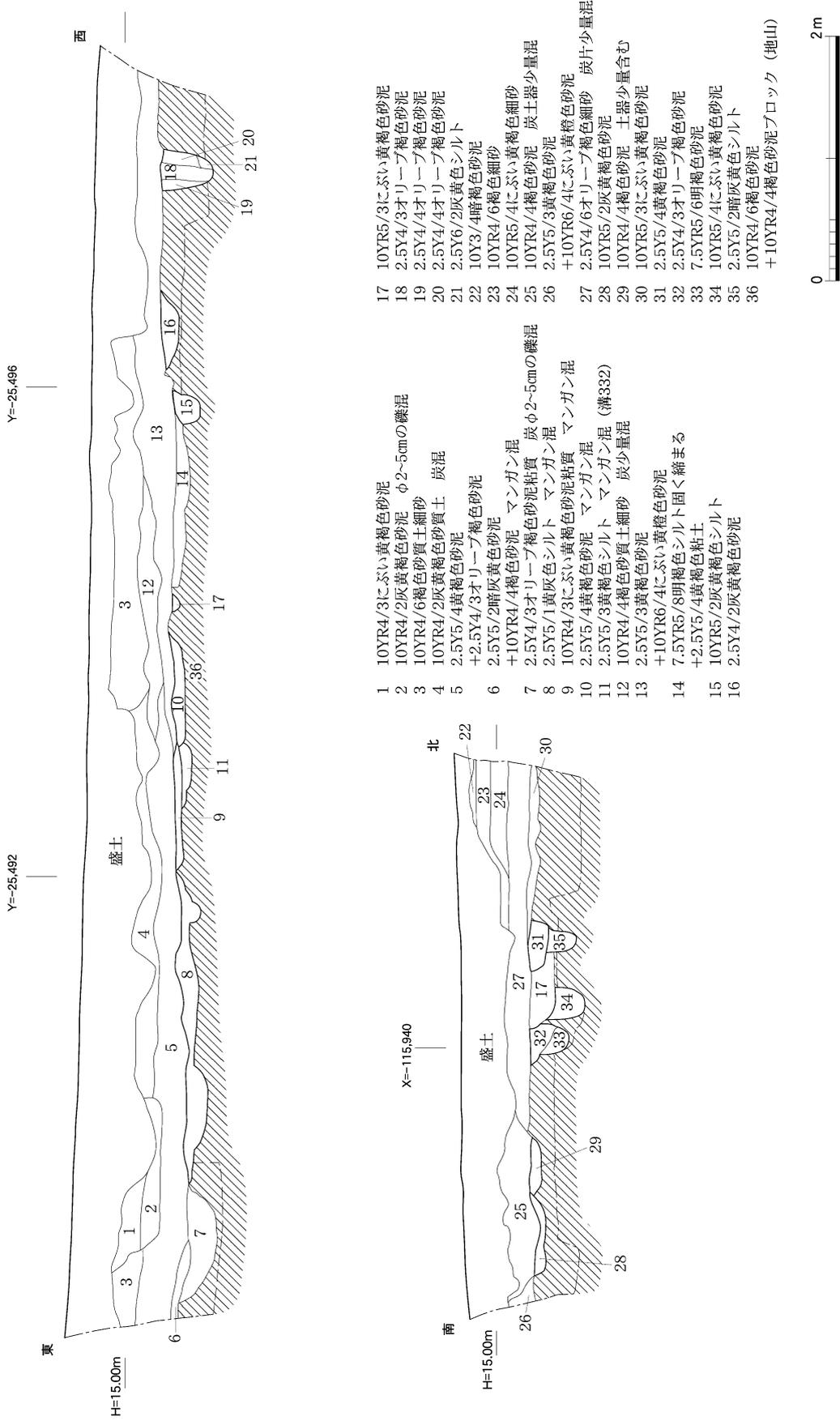
2 区の基本層序は、現代盛土が 0.2 ～ 0.4 m、以下、褐色・黄褐色を主体とする整地土層が 0.2 ～ 0.5 m の厚さでほぼ均一に堆積し、その直下は地山となっている。

第 1 面および第 2 面の遺構は、地山直上で検出している。ただし、地山上面の土壌化が進み検出が困難であったことから、上面を 5 cm 程度掘り下げ、第 2 面として遺構検出を行った。地山の標高は西部で 14.75 m、東部では 14.50 m と西に高くなっている。

2) 室町時代から江戸時代初頭の遺構 (図 18、図版 4)

掘立柱建物、柵、柱穴などを検出した。

建物 2 (図 19、図版 5) 2 区は 1999 年度調査 C 1 区の南側にあたる。前回の調査と 2 区北半部では多数の柱穴を密集し、一部重複して検出しており、建物の建替えが複数回あったことを示している。極めて煩雑な状況であるため建物の復元は困難であるが、1 棟の掘立柱建物を復元してみた。復元長は東西約 8 m × 南北約 4.1 m となる。柱穴は重複して並ぶため不確定であるが、掘形は径 0.15 ～ 0.5 m あり、柱間の距離は 0.9 ～ 2.4 m ある。柱穴からは土師器、須恵器、瓦器、



- 1 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
- 2 10YR4/2灰黄褐色砂泥 φ2~5cmの礫混
- 3 10YR4/6褐色砂質土細砂
- 4 10YR4/2灰黄褐色砂質土 炭混
- 5 2.5Y5/4黄褐色砂泥
- 6 +2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥
- 7 2.5Y4/4褐色砂泥 マンガン混
- 8 2.5Y5/1黄灰色シルト マンガン混
- 9 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 炭φ2~5cmの礫混
- 10 2.5Y5/4黄褐色砂泥 マンガン混
- 11 2.5Y5/3黄褐色シルト マンガン混 (溝332)
- 12 10YR4/4褐色砂質土細砂 炭少量混
- 13 2.5Y5/3黄褐色砂泥 +10YR6/4にぶい黄褐色砂泥
- 14 7.5YR5/8明褐色シルト固く締まる +2.5Y5/4黄褐色粘土
- 15 10YR5/2灰黄褐色シルト
- 16 2.5Y4/2灰黄褐色砂泥
- 17 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥
- 18 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥
- 19 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥
- 20 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥
- 21 2.5Y6/2灰黄色シルト
- 22 10Y3/4暗褐色砂泥
- 23 10YR4/6褐色細砂
- 24 10YR5/4にぶい黄褐色細砂
- 25 10YR4/4褐色砂泥 炭土器少量混
- 26 2.5Y5/3黄褐色砂泥 +10YR6/4にぶい黄褐色砂泥 炭片少量混
- 27 2.5Y4/6オリーブ褐色砂泥
- 28 10YR5/2灰黄褐色砂泥
- 29 10YR4/4褐色砂泥 土器少量含む
- 30 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥
- 31 2.5Y5/4黄褐色砂泥
- 32 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥
- 33 7.5YR5/6明褐色砂泥
- 34 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥
- 35 2.5Y5/2暗灰黄色シルト
- 36 10YR4/6褐色砂泥 +10YR4/4褐色砂泥ブロック (地山)

図 17 2区南壁・西壁断面図 (1 : 50)

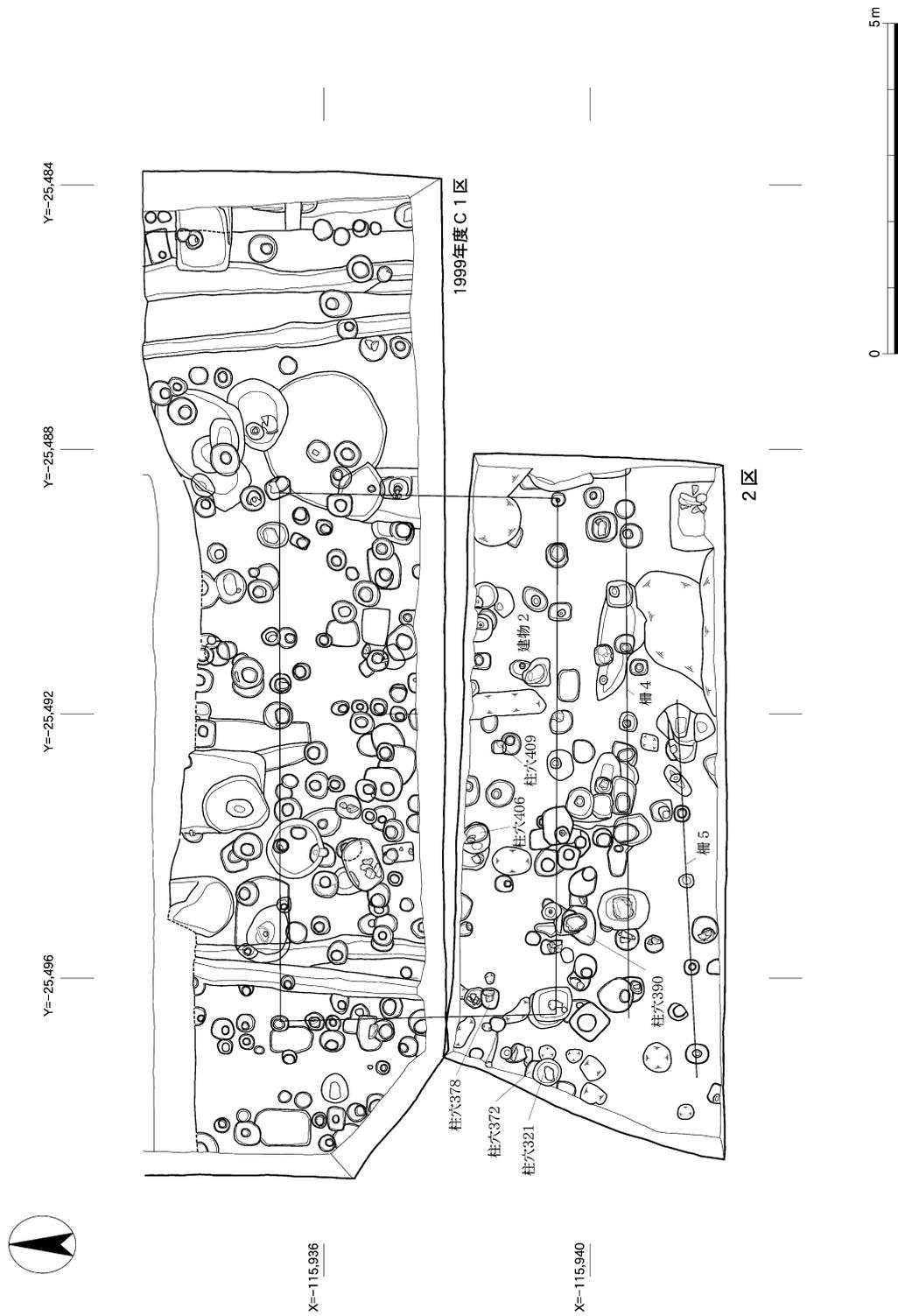


図 18 2区遺構平面図 [室町時代から江戸時代初頭] (1 : 100)

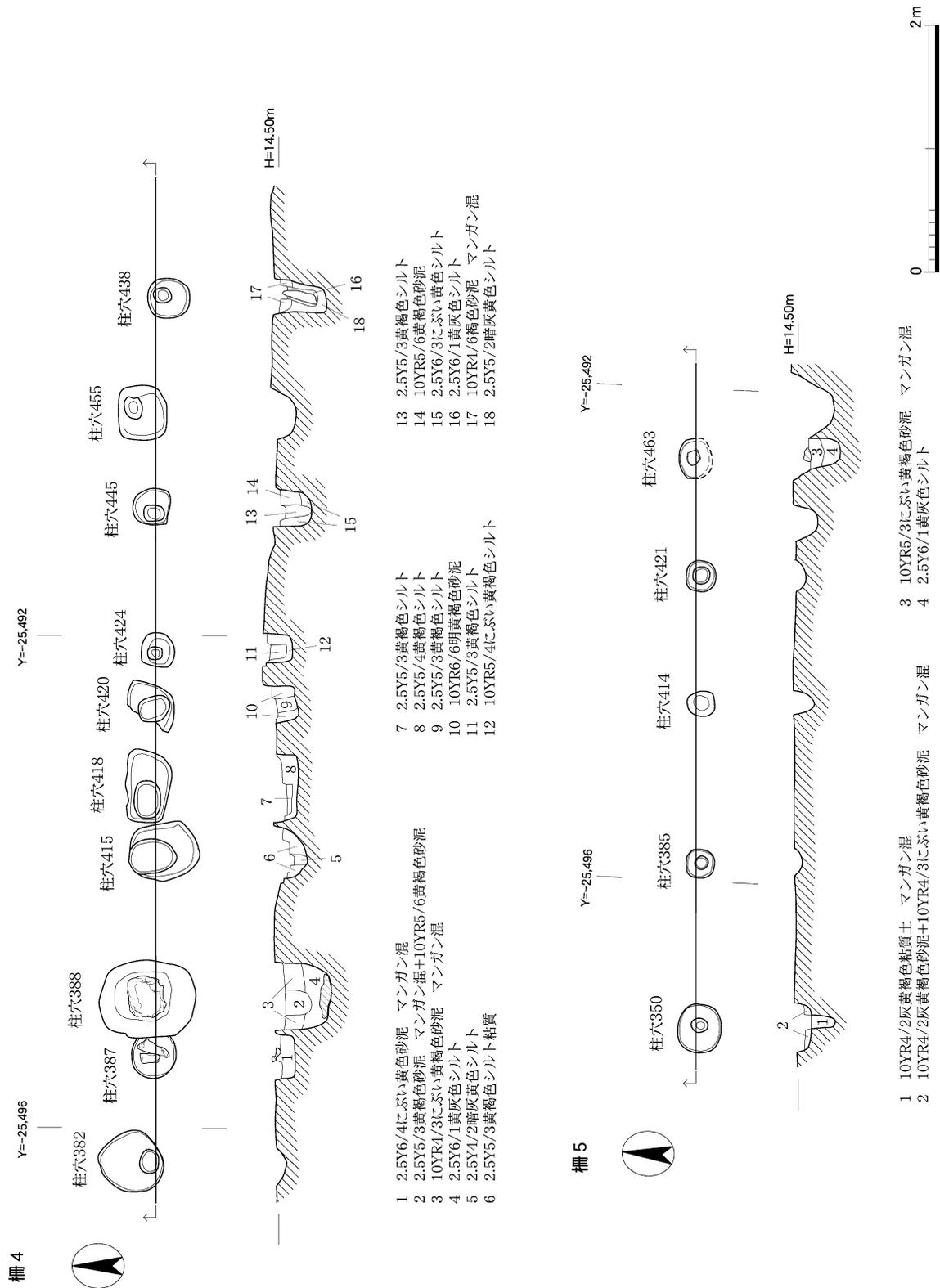


図 20 柵 4・5実測図 (1 : 50)

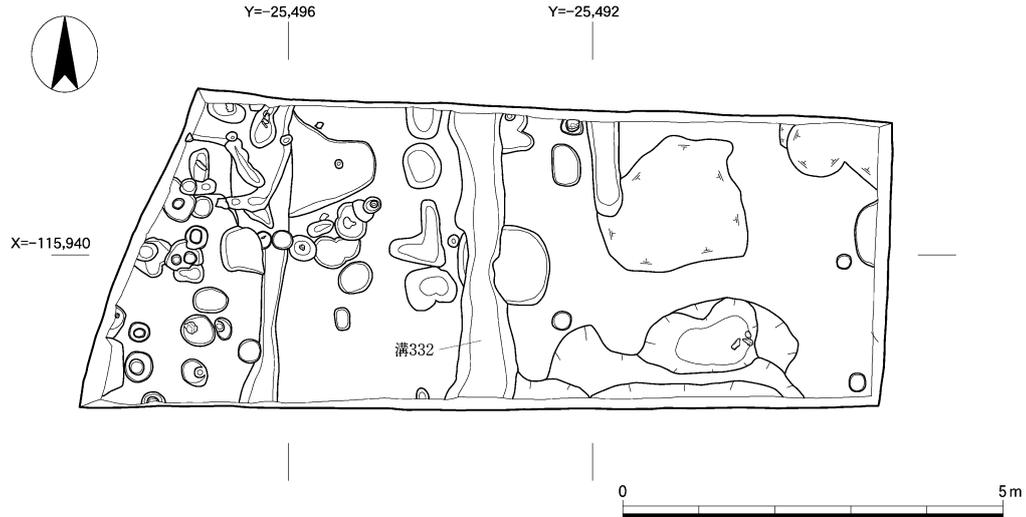


図 21 2区遺構平面図 [江戸時代] (1 : 100)

施釉陶器などが出土した。

柵 4・5 (図 20、図版 5) 建物 2 の南で東西方向の柱穴列を 2 列検出した。柱穴掘形は 0.2 ～ 0.4 m のものが大半である。柵 4 の柱間距離は 0.4 ～ 1.3 m あり、柱穴 388 には根石が据えられており、柱穴 438 には柱根が残っていた。柵 4 は建物の一部である可能性がある。柵 5 の柱間距離は 1.0 ～ 1.3 m あり、柱穴 350 には柱根が残っていた。柱穴 463 には根石が据えられている。

柱穴 372 調査区北半部、西壁際で検出した。残存長 0.25 m 以上である。遺構の南半部は他の遺構に削られている。瓦器、輸入白磁が出土した。

柱穴 378 (図版 5) 調査区北半部西隅で検出した。長径 0.32 m、短径 0.27 m、深さ 0.32 m である。根石が 2 段重ねられている。

柱穴 390 調査区西半部中央で検出した。長径 0.58 m、短径 0.28 m、深さ 0.13 m である。土師器、瓦器、須恵器などが出土した。

柱穴 406 調査区西半部、北壁際で検出した。長径 0.48 m、短径 0.38 m、深さ 0.45 m である。土師器、瓦器が出土した。

3) 江戸時代の遺構 (図 21、図版 4)

柱穴群、溝などを検出した。

柱穴群 調査区西半部でまとめて検出したが、建物などを復元するには至らなかった。掘形は径 0.2 ～ 0.4 m が大半である。

溝 332 調査区中央部で検出した。幅 0.4 ～ 0.7 m、深さ 0.1 m 前後である。灰黄色砂泥の埋土から土師器などが出土した。この溝の西には柱穴が多くみられ、東にはほとんどみられないことから、居住区とそれを区画する溝とみられる。

4. 遺 物

(1) 遺物の概要

弥生時代から江戸時代にいたる遺物が整理箱にして41箱出土した。内容は土器類、瓦類、金属製品、石製品、土製品、木製品などがある。その大半は土器類で、次いで木製品が多い。全体的には室町時代から江戸時代の土器類や木製品の割合が大きく、弥生時代から平安時代の遺物は少ない。

弥生時代の遺物には石鏃、古墳時代の遺物には須恵器、長岡京期・平安時代の遺物には土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入磁器などがある。これら時期の古い遺物はすべてより新しい時代の遺構や包含層に混入して出土した。

室町時代から江戸時代初頭の遺物には土師器・瓦器・施釉陶器・焼締陶器、金属製品には銭貨、石製品には砥石、木製品には下駄・曲物・桶・漆椀・板状製品・棒状製品などがある。

江戸時代の遺物には土師器・土師質土器・施釉陶器・焼締陶器・磁器、金属製品には鎌・鋸・釘・キセル、石製品には砥石・硯・石臼、木製品には曲物・桶・漆椀・箱物などがある。

(2) 土器類

土器類は出土遺物の多くを占める。ここでは古墳時代から江戸時代の土器を報告する。時代別の出土量では、古墳時代から平安時代の土器類はごく少量で、室町時代から江戸時代初頭が約3割、江戸時代が約7割を占める。

表3 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	石製品		石鏃1点		
古墳時代 ～平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、 灰釉陶器、輸入磁器		土師器1点、須恵器8点、緑釉陶器1点、 灰釉陶器1点、輸入白磁2点		
室町時代～ 江戸時代初頭	土師器、土師質土器、瓦器、 焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、 金属製品、石製品、土製品、木製品		土師器28点、土師質土器6点、 瓦器7点、焼締陶器4点、施釉陶器6点、 銭貨8点、砥石1点、土錘1点、 木製品25点		
江戸時代	土師器、土師質土器、瓦器、 焼締陶器、施釉陶器、軟質施釉陶器、 磁器、瓦、金属製品、石製品、土製品、 木製品		土師器43点、土師質土器14点、 瓦器1点、焼締陶器3点、施釉陶器16点、 軟質施釉陶器4点、磁器9点、 金属製品5点、砥石3点、硯1点、 木製品7点		
明治時代以降	施釉陶器				
合 計		47箱	206点（9箱）	34箱	4箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より6箱多くなっている。

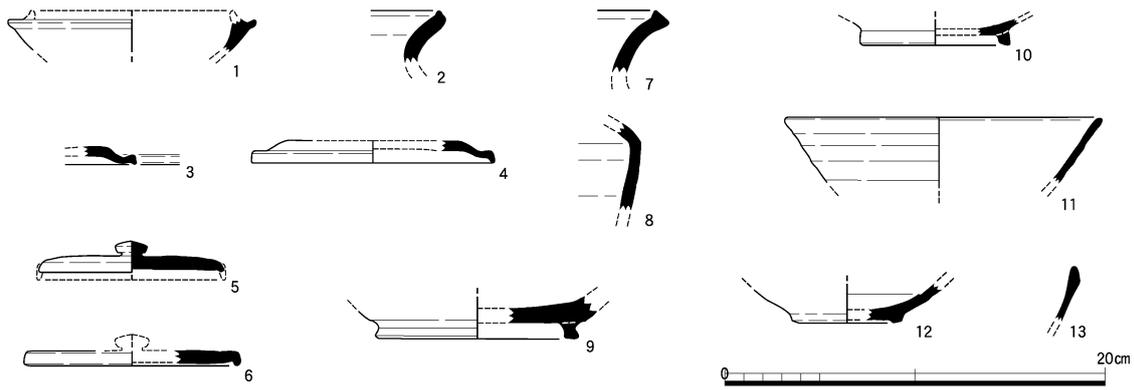


図 22 土器実測図 1 [古墳時代から平安時代] (1 : 4)

1) 古墳時代から平安時代 (図 22、図版 8)

出土土器はすべてより新しい時代の遺構や包含層に混入して出土したものである。ほとんどが小片で、調整が不明瞭な個体が多く、図示できたものは少ない。

古墳時代 (1) 古墳時代の土器には須恵器杯身 (1) がある。ロクロ成形で口縁部外側に蓋の受部がつく。焼成はやや軟質。古墳時代後期に属する。溝 3 B から出土した。

長岡京期から平安時代 (2 ~ 13) 長岡京期から平安時代の土器には土師器甕 (2)、須恵器杯蓋 (3・4)・壺蓋 (5・6)・甕 (7)・壺 (8・9)、緑釉陶器碗 (10)、灰釉陶器碗 (11)、白磁碗 (12・13) がある。2 は土師器甕の口縁部の破片である。口縁部は外反し端部は内側につまみあげる。調整は内外面に横ナデを施す。堀 210 から出土した。須恵器杯蓋 3・4 は天井部から口縁部が屈曲して端部はわずかに垂下する。つまみは不明である。壺蓋 5・6 は平坦な天井部から口縁端部が垂下する。5 にはつまみがつくが、6 は欠損している。杯蓋の調整は天井部外面は回転ケズリ、天井部内面・口縁部内外面は横ナデである。3 は水路 60、4 は溝 3 B、5 は柱穴 390、6 は溝 1 から出土した。7 は甕の口縁部の破片で、口縁部は外反し、内外面は横ナデを施す。水路 60 から出土した。8 は壺の肩部の破片で、体部は直線的に延び肩部で屈曲する。調整は内外面回転ナデである。溝 5 から出土した。9 は壺の底部で、貼付け高台である。外面は回転ナデ、高台の貼付け部分を強くなでて、圧着させる。底部内面は滑らかで使用痕が認められる。墨痕がないことから砥石に転用したものとする。水路 60 から出土した。10 は緑釉陶器碗の底部である。貼付け高台で、釉がわずかに残存する。高台の内外面に横ナデが認められる。水路 60 から出土した。11 は灰釉陶器碗の口縁部の破片で、口縁部は直線的に開く。調整は内外面とも回転ナデで内面に灰釉を施す。溝 3 B から出土した。12 は白磁碗の底部の破片で、削出高台、内面には段がつく。内外面に釉を施し、底部外面は露胎する。水路 60 から出土した。13 は口縁部が折り返されて玉縁状を呈する。柱穴 372 から出土した。12・13 は中国産である。

2) 室町時代から江戸時代初頭 (図 23・24、図版 6)

柱穴 406 (14 ~ 16) 14・15 は土師器皿である。口縁部は屈曲して外反気味に開く。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面は横ナデである。16 は瓦器碗である。体部が直線

的に開き上部で外反し口縁端部は丸くおさめる。内面に粗いミガキを施す。14世紀前半に属する。

柱穴 321 (17) やや丸みをおびた底部から体部が短く開く小型の土師器皿である。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面は横ナデである。14世紀前半に属する。

東門柱穴 243 (18) 土師器の白色系大型皿で、平坦な底部から体部は直線的に大きく開き、底部内面に圈線がつく。調整は磨滅して不明である。16世紀中頃に属する

土坑 298・232 (19・20) 19は土坑 298、20は土坑 232 から出土した。ともに丸みのある底の土師器小型皿で、粗い作りである。調整は底部外面はオサエ、内面はナデ、口縁部内外面は

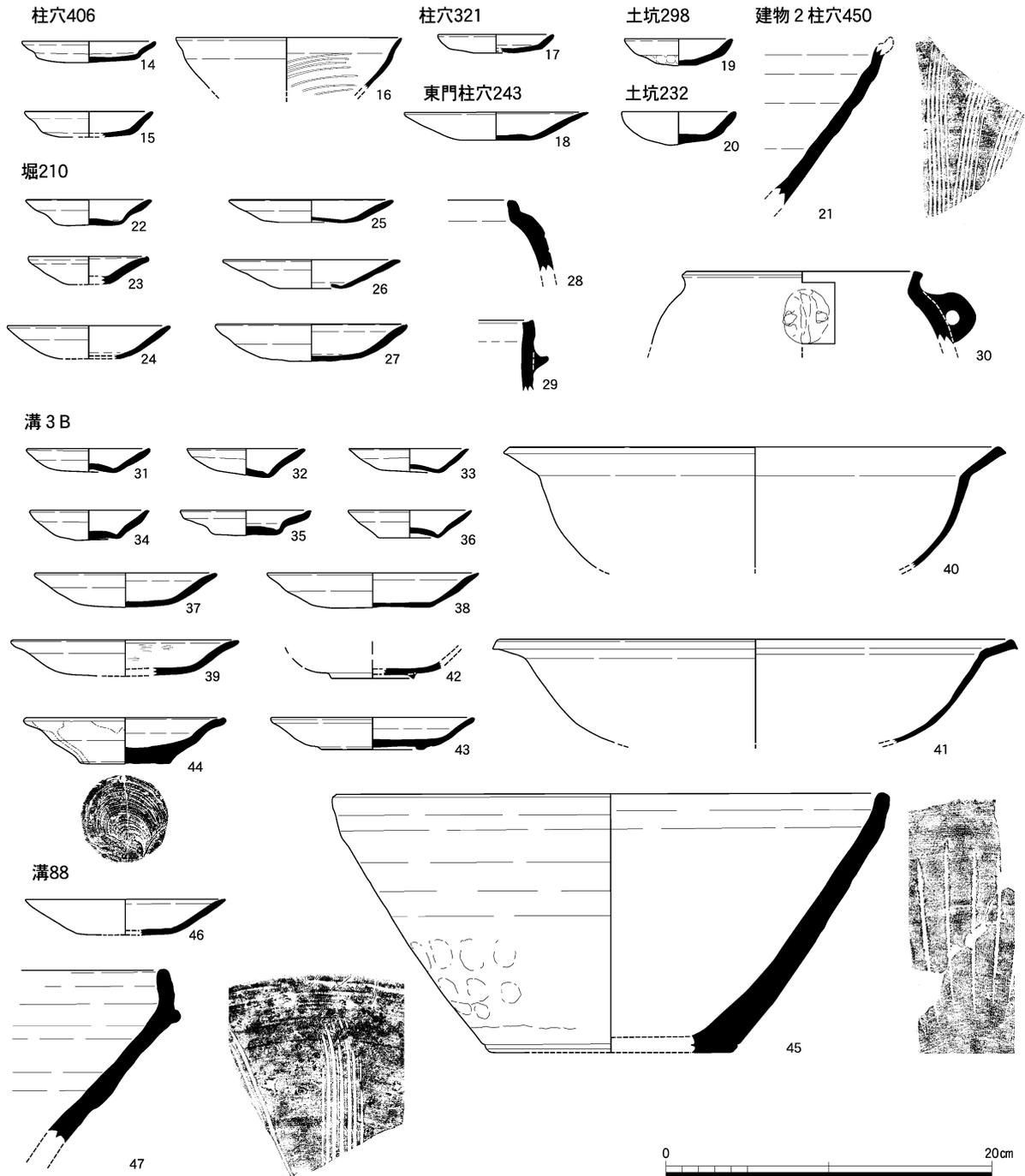


図 23 土器実測図 2 [室町時代から江戸時代初頭] (1 : 4)

横ナデである。19は内面に煤が付着。20は砂が混じる粗い土である。ともに口径の割に器高が高く京内で見られない、京都近郊産の皿である。16世紀中頃に属する。

建物2柱穴450(21) 焼締陶器信楽産の播鉢である。調整は内外面ともに横ナデで、播目は5本単位である。16世紀後半に属する。

堀210(22~30) 22~27は土師器皿である。22・23は赤色系小型皿で、22は口縁部が屈曲して開き、23はやや外反気味に開く。24~27は白色系大型皿で、平底から体部が直線的に開く。28~30は瓦器で、28・29は羽釜である。28は口縁部のみであるが、下方に延びる体部上部に鏝がつくタイプである。口縁端部は丸く、外面に2条の沈線を施す。調整はともに内外面横ナデである。30は火入れで、肩部に穿孔した把手がつく。紐などを通して使用したものである。時期は16世紀代に属する。

溝3B(31~45) 31~39は土師器皿である。31~36は赤色系小型皿で、いずれも調整は粗雑で底部外面はオサエ、内面はナデで口縁部内外面は横ナデである。後述する溝88の合流点の下層でまとまって出土した。16世紀前半から中頃に属し、上層の遺物より古い。37~39は白色系大型皿で、平坦な底部から体部がやや外反気味に開く。40・41は土師質土器の焙烙である。丸みをおびた体部を台型成形し、口縁部を継ぎ足している。口縁端部は外方に若干肥厚する。42は

堀211

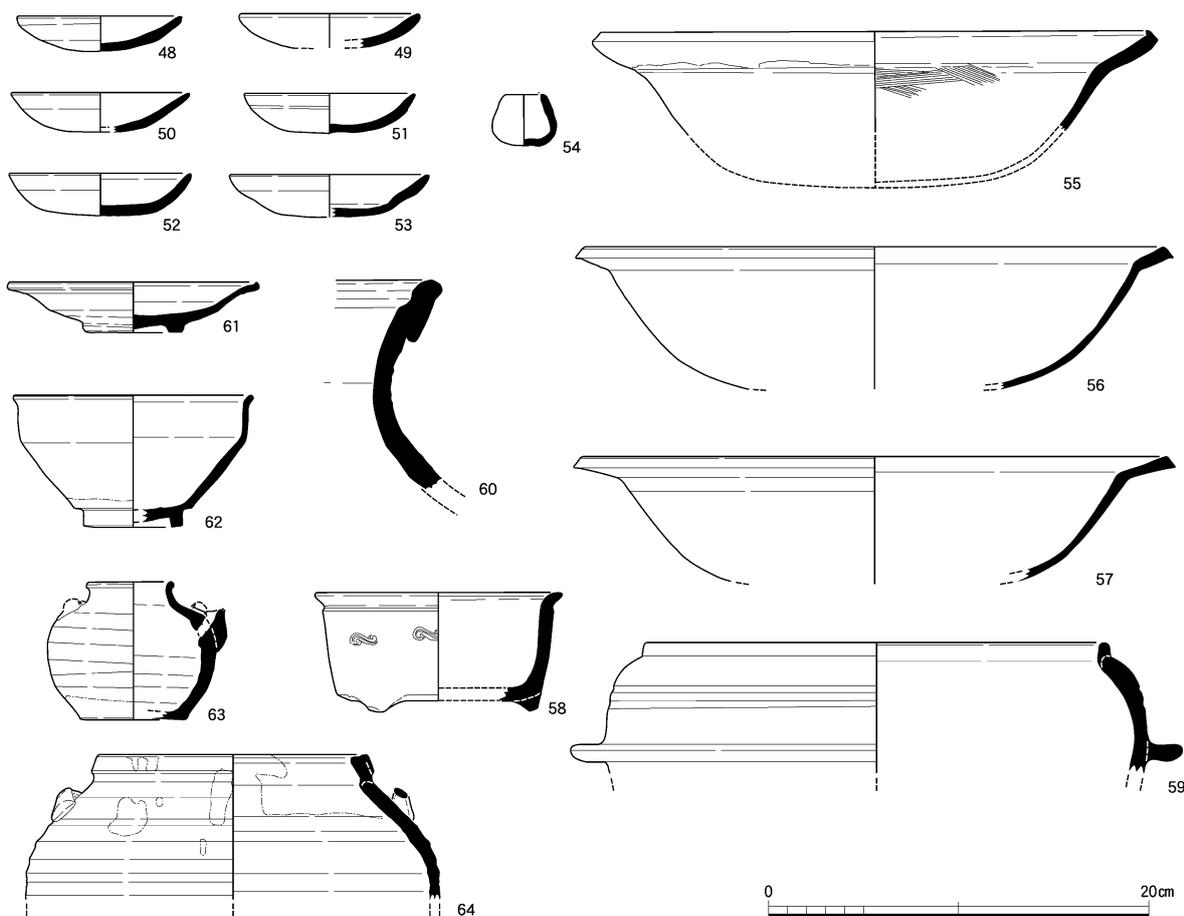


図24 土器実測図3 [室町時代から江戸時代初頭] (1:4)

瓦器椀で、底部に粗い作りの貼付け高台を付ける。15世紀代に属し、混入品である。43・44は施釉陶器である。43は美濃産の皿で、白濁した釉を全面に施す。44は唐津産の皿で、内外面に鉄釉を施す。底部外面は糸切り痕、内面には砂目跡がつく。45は焼締陶器丹波産の播鉢である。体部は直線的に開き、端部は丸くおさめる。播目は単線である。調整は内面・外面上部は横ナデ、外面下部は指の圧痕がつく。16世紀中頃～17世紀初頭に属する。

溝 88 (46・47) 46は土師器の白色系大型皿である。平底から体部が直線的に開く。47は焼締陶器備前産の播鉢である。体部は直線的に開く。口縁は屈曲して立ち上がり、端部は丸くおさめる。外面に段がつく。播目は7本単位である。調整は内外面横ナデである。16世紀後半～17世紀初頭に属する。

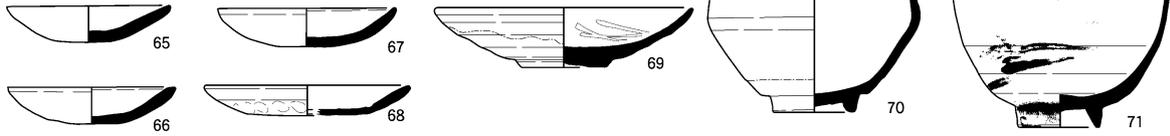
堀 211 (48～64) 48～53は土師器皿である。48～52は丸底の中型皿で、口縁部は外上方にのびる。調整は底部外面はオサエ、底部内面はナデで口縁部内外面は横ナデ。52の口縁には煤が付着する。53は底部から口縁部が少し屈曲して開き、底部内面に圏線がつく。54～57は土師質土器で、54は手捏ね成形の小壺である。55～57は焙烙で台型成形し、口縁は継ぎ足す。55の口縁端部はつまみあげ、継ぎ足し部内面はハケ目調整を施す。56・57の口縁端部は外方に若干肥厚する。58・59は瓦器で、58は香炉である。口縁部は外反して開き、底部に足がつく。体部外面に波状の押型文を施す。59は羽釜である。口縁は垂直に立ち上がり、体部外面上部に2条の線を施す。60は焼締陶器信楽産の甕で、大きく折り返された幅広の口縁をもつ。胎土に大粒の長石が入る。61～64は施釉陶器である。61・64は唐津産の皿・壺、62・63は美濃産の天目椀・水注である。61は削出高台で、高台と底部内面に砂目跡がつく。全面にやや黄色味があった白濁釉を施す。62は削出高台で、鉄釉を施す。63は土瓶の形をした水注で、把手部分は欠損している。糸切り底部外面と体部外面下部以外に鉄釉を施す。底に約2cmの穴が開く。転用するために開けたものと考えられる。64の壺はロクロ成形で、肩部に紐を通す把手を貼り付ける。体部内面に釉を施す。溝88よりやや新しい土器が出土することから、時期は16世紀末～17世紀前半に属する。

3) 江戸時代 (図 25・26、図版 6・7)

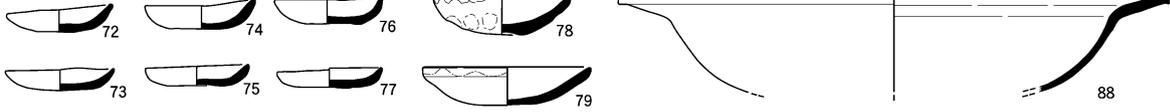
溝 5 (65～71) 65～68は土師器皿である。65～67は丸底の中型皿で、口縁部は外上方にのびる。68は底部は平坦で内面に圏線がつく。69・70は施釉陶器である。69は唐津産の皿である。削出高台で釉の焼成状態が悪く、わずかに口縁部内面に鉄絵が認められる。70は美濃産の天目椀である。削出高台で鉄釉を施す。71は肥前産の染付椀である。口縁部をヘラで押さえて窪ませ輪花を施す。体部外面に波状の文様を描く。17世紀後半に属する。

溝 4 (72～90) 72～83は土師器皿である。72～77は手捏ねの小型皿。78～80は丸底の中型皿で、口縁部は外上方にのびる。78は口径の割に器高が高く京都近郊産と考えられる。81～86は大型皿で、底部内面に圏線がつく。中型・大型皿には口縁に煤が付着するものが多い。87～89は土師質土器である。87は手捏ねの小型壺、88・89は焙烙である。焙烙はともに丸みをおびた体部を台型成形し、口縁部を継ぎ足している。89は口縁部が内弯気味に開き肥厚する。

溝 5



溝 4



溝 3 A

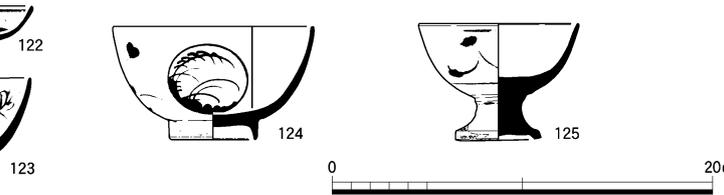
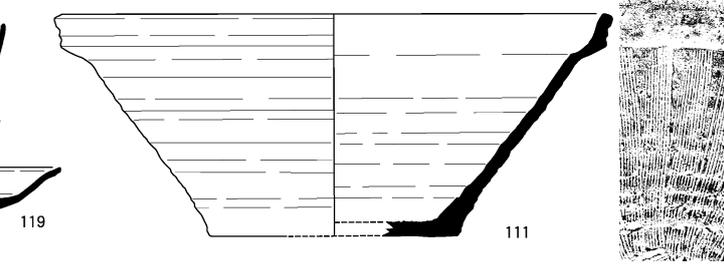
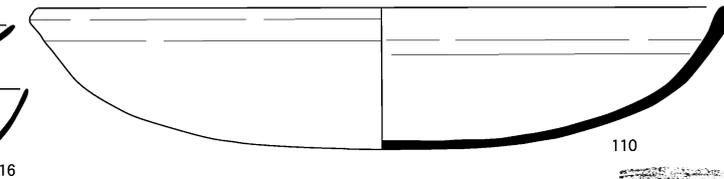
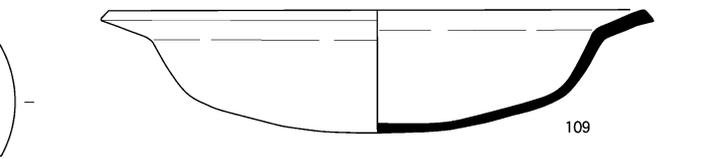
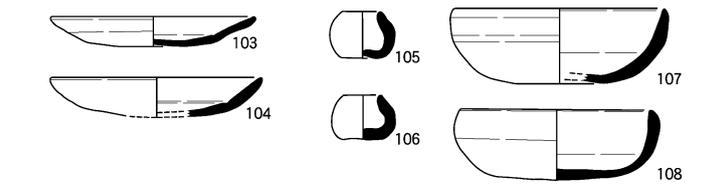
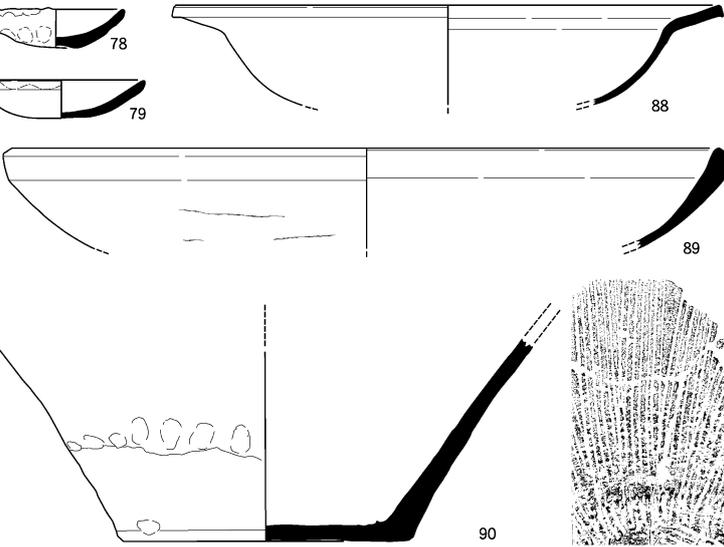
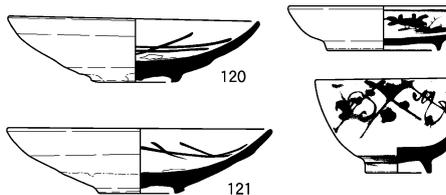
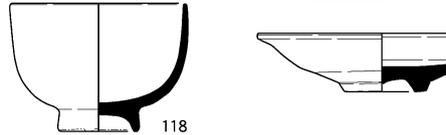
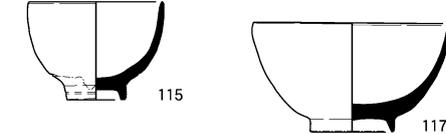
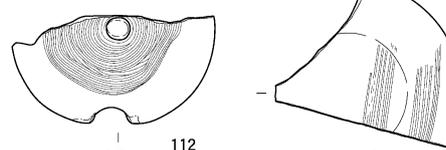
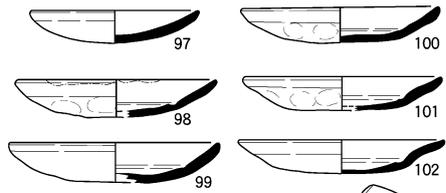
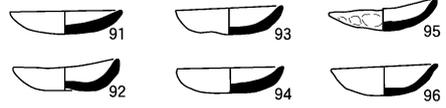


図 25 土器実測図 4 [江戸時代] (1 : 4)

90 は焼締陶器丹波産の播鉢である。播目は7本単位で、底部内面にも円形の播目を施す。調整は体部内外面は横ナデ、体部外面下方に指の圧痕がつく。時期は溝5よりやや新しく17世紀後半～末に属する。

溝3A (91～125) 91～104は土師器皿である。91～96は手捏ねの小型皿。97は丸底の中型皿。98～104は大型皿で、底部内面に圈線がつく。大型皿は溝4出土の皿よりやや大型化となる。105～110は土師質土器である。105・106は手捏ねの小型壺。107・108は鉢で、丸味をおびた底部から内弯して、口縁端部は丸くおさめる。109・110は焙烙である。ともに丸みをおびた体部を台型成形し、口縁部を継ぎ足している。110は口縁部が内弯気味に開き肥厚する。111は信楽産の播鉢である。底部から体部が直線的に開き、口縁部は屈曲して立ち上がる。調整は体部内外面は横ナデ。播目は9本単位で底部内面にも播目を施す。112・113は軟質施釉陶器の灯火具の蓋と皿である。112の蓋はロクロ成形で、つまみがつき、灯芯が出る部分を半円形に開ける。外面上面のつまみの周囲に櫛で円を描く。全体に透明釉を施す。113の灯明皿は口縁から底部にかけて櫛で線を引く。114～121は施釉陶器である。114は美濃産の鉄釉丸椀で、全面に釉を施す。体部外面下部に目跡が3箇所つく。115は唐津産の小椀である。削出高台で、底部外面と体部下部を除きオリーブ色の釉を施す。116は肥前系の平椀である。器壁は薄く丁寧な作りである。体部内面に呉須や鉄釉で宝珠などの模様を小さく描く。117は肥前系のハケ目椀である。全面にハケで釉を施す。高台端部には砂が融着する。118は肥前系の椀で、碁笥高台底である。全面に灰釉を施す。119～121は唐津産の皿である。119は全面に釉を施す。120・121は鉄釉で模様を描くが、上釉が焼成不良で不鮮明である。いずれも削出高台で、120の端面には糸切りの痕跡が残る。119は底部内面と高台に、120・121は底部内面に砂目跡が4箇所つく。122～125は肥前産の染付である。122は皿で、内面に草花文を描く。123・124は椀である。123は小振りで、外面に垣根と蔓草を描き、124は外面を4に区画し円窓と草花文を交互に描き、窓の中にはススキを描く。125は仏飯器である。脚裾部露胎とし、外面に唐草を描く。17世紀後半～18世紀代に属する。

水路60 (126～146) 126～133は土師器皿である。126～128は手捏ねの小型皿。129・130は丸底の中型皿。131～133は大型皿で、底部内面に圈線がつく。134～136は土師質土器である。134は浅い平底の鉢で、内弯する体部をもつ。135は焙烙で、体部を台型成形し、口縁部は粘土を継ぎ足す。136は火鉢である。体部は内弯し、上面が平坦な口縁をもつ。底部には輪高台がつき、体部外面と口縁部にミガキを施す。137は瓦器の香炉である。体部は垂直に立ち上がり、底部には輪高台がつく。体部外面にミガキを施し、印を押す。138は信楽産の播鉢である。体部は大きく開き、調整は内外面横ナデ、播目は7本単位で、底部内面にも斜め格子状に播目を施す。139～143は施釉陶器である。139は肥前系の平椀で、底部内面を釉ハギとする。140～142は唐津産の鉢である。削出高台で、140・142は底部内面を釉ハギとする。141は底部内面と高台に砂目跡が4箇所つく。143は唐津産の大鉢である。口縁端部は玉縁、削出高台である。底部の器壁は体部の器壁に比較して非常に薄い。口縁端部と高台内を除いてハケで釉を施す。

水路60

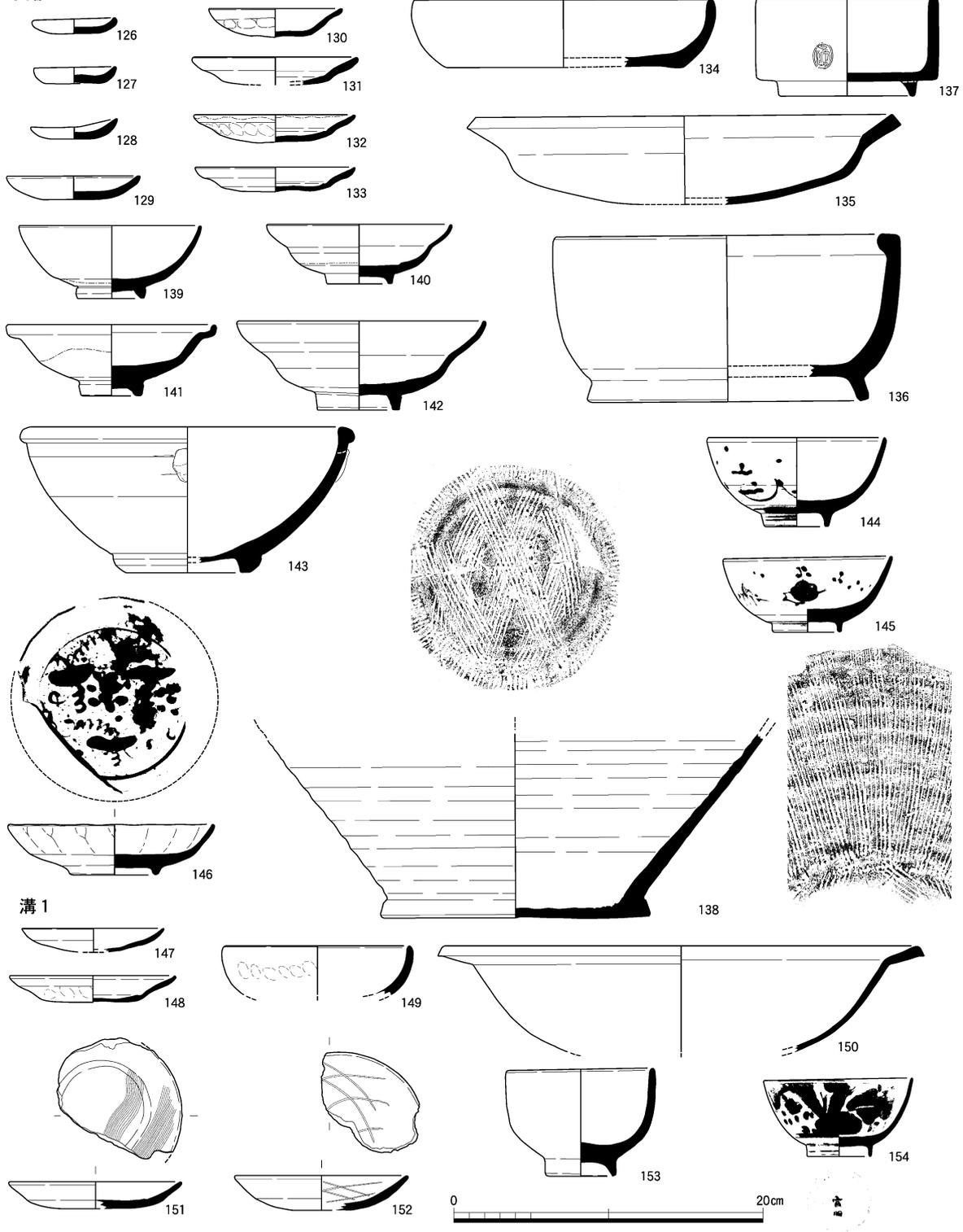


図 26 土器実測図 5 [江戸時代] (1 : 4)

144 ~ 146 は肥前産の染付である。144・145 は椀で、底部内面を釉ハギとする。外面には 144 は唐草、145 は草花文を描く。146 は皿で、体部外面に面取りを、口縁端部に鉄釉を施す。見込みには蔓草などの草花文を描く。17 世紀後半 ~ 19 世紀初期に属する。

溝 1 (147 ~ 154) 147・148 は土師器で、147 は丸底中型皿。148 は大型皿で、底部内面

に圈線がつく。水路 60 出土の皿と比較すると器壁は薄い。149・150 は土師質土器である。149 は鉢で、丸味の帯びた底部から体部は内弯する。150 は焙烙で、台型成形で口縁部は粘土を継ぎ足す。151・152 は軟質施釉陶器の灯明皿である。151 は内面に櫛描文、152 は線描を施す。153 は施釉陶器である。肥前系の椀で、碁笥高台底で高台に砂が付着する。154 は肥前産の染付の椀である。やや小振りで、外面と見込みに草花文、高台内に「宣明」の文字を描く。18 世紀代～19 世紀初期に属する。

(3) 瓦類

瓦類は整理箱に 1 箱出土した。大半は攪乱や溝 1 などから出土したもので、江戸時代の道具瓦・平瓦・棧瓦などがある。破片は小片が多く図示できるものはない。

(4) 金属製品 (図 27、図版 8)

金属製品には鉄製品、銅製品、銭貨がある。

鉄製品 (金 1～金 3) 金 1 は鎌の刃である。柄の取り付け部に楔と木片が少量遺存する。水路 60 から出土した。金 2 は小型の鋸で、断面は方形である。第 1 面整地層から出土した。金 3 は釘で、頭部は欠損する。断面は方形である。土坑 45 から出土した。

銅製品 (金 4・金 5) 金 4 は管状製品で、薄く板状に延ばした銅を繋ぎ合わせたもので、用途は不明。土坑 213 から出土した。金 5 はキセルの首部で、火皿は欠損し、小口に繋がる部分は破損している。水路 60 から出土した。

銭貨 (金 6～金 13) 9 枚出土した。内訳は北宋銭 7 枚 (6 種 7 枚)、明銭 1 枚、朝鮮銭 1 枚である。

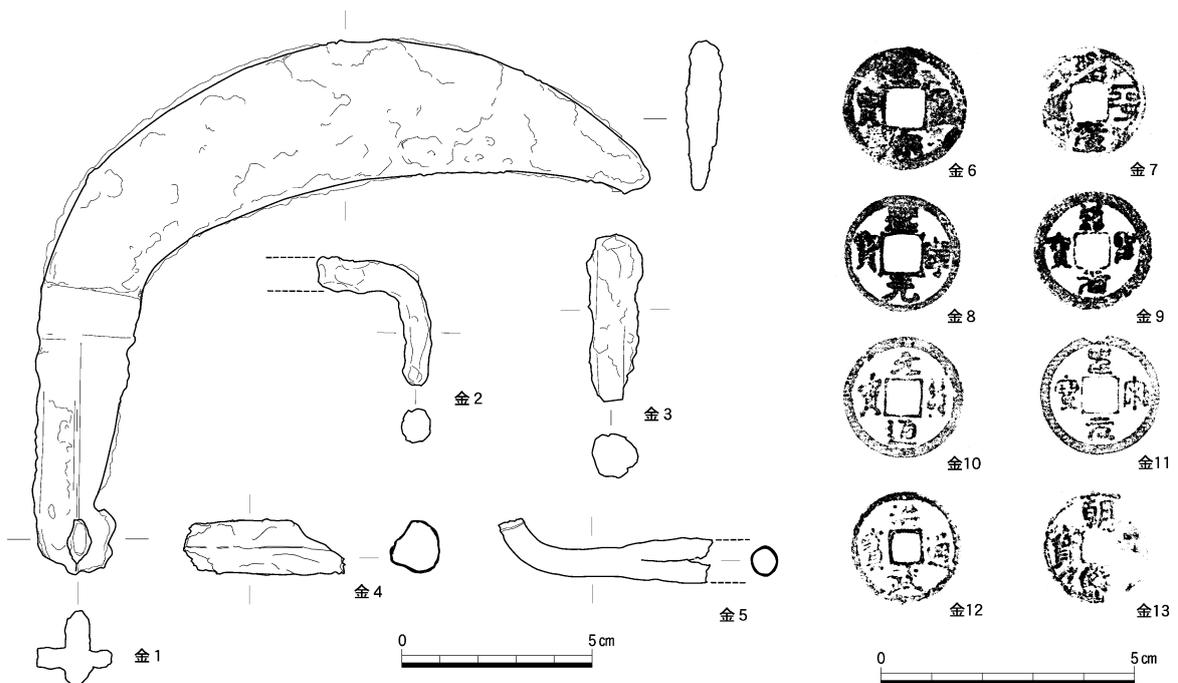


図 27 金属製品実測図 (1 : 4)、銭貨拓影 (2 : 3)

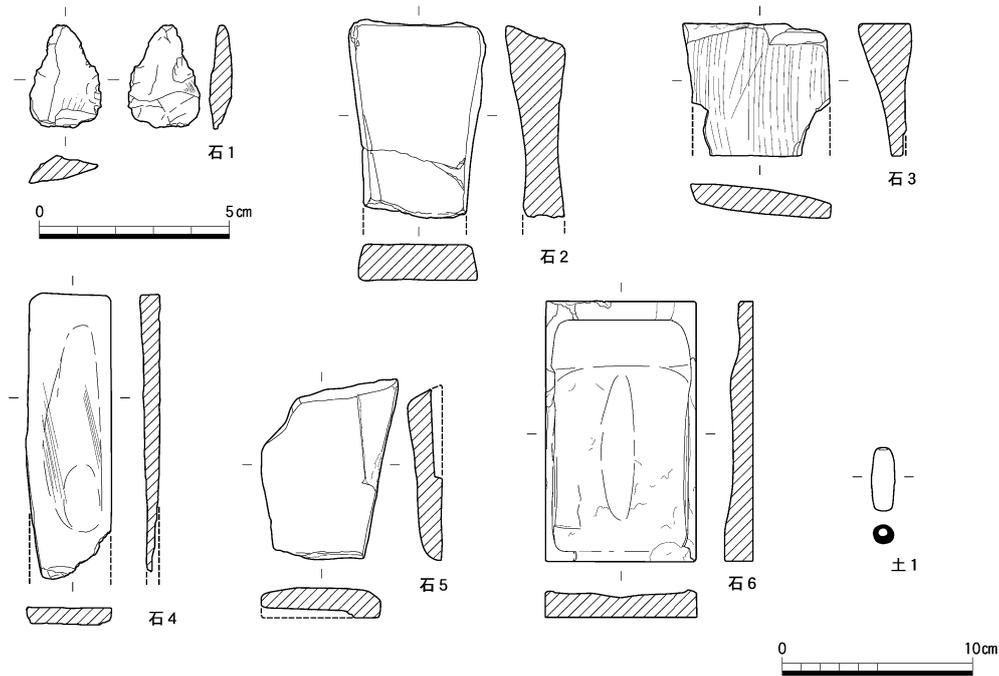


図28 石製品・土製品実測図（1：4、石1のみ1：2）

金6は北宋銭「皇宋通寶」、初鑄は1039年である。重さは2.4g。溝332から出土した。金7は北宋銭「治平元寶」、初鑄は1064年である。重さは1.6g。腐食がはげしく脆い。溝7から出土した。金8は北宋銭「熙寧元寶」、初鑄は1068年である。重さは2.4g。堀210から出土した。金9は北宋銭「紹聖元寶」、初鑄は1094年である。重さは2.3g。溝3Bから出土した。金10は北宋銭「元符通寶」、初鑄は1098年である。重さは3.3g。堀210から出土した。金11は北宋銭「聖宋元寶」、初鑄は1101年である。重さは3.2g。堀210から出土した。金12は明銭「洪武通寶」、初鑄は1368年である。重さは4.3g。溝3Bから出土した。金13は朝鮮銭「朝鮮通寶」、初鑄は1423年である。重さは1.3g。腐食がはげしく折れ曲がっている。溝19から出土した。

（5）石製品（図28、図版9）

石製品には石鏃未製品・砥石・硯・石臼などがある。ここでは石臼以外の製品について記述する。

石鏃未製品（石1） 石材はサヌカイトである。第1面の整地層から出土した。

砥石（石2～石5） 石2はやや大型で両端が欠損する。表裏・両側面の4面とも滑らかで磨滅している。石材は灰色の砂岩である。堀211から出土した。石3は表裏・端部・側面の4面が滑らかで磨滅しており、下部を切断している。石材は褐灰色の泥岩である。溝3Aから出土した。石4は下部が欠損し、裏面は剥離している。表・両側面の3面が滑らかで磨滅している。石材はにぶい黄色の粘板岩である。溝3Aから出土した。石5は表・側面が滑らかで磨滅している。下部は切断痕がある。石材は褐灰色の砂岩である。水路60から出土した。

硯（石6） 表面は剥離や欠けがあり、陸部中央が凹む。石材は粘板岩である。水路60から出土した。

(6) 土製品 (図 28、図版 8)

出土した土製品には土錘や土人形などがある。ここでは1点のみであるが土錘について述べる。

土錘(土1) 細い棒状の芯に粘土を巻き付けて成形をしたもので、外形はほぼ円筒形をなす。第1面の整地層から出土した。

(7) 木製品 (図 29・30、図版 9・10)

木製品には漆器類、下駄、曲物底板、箸、木球、桶側板などの生活用品や建具の一部、板状製品・棒状製品などがある。漆器類は木質が腐植して原形を留めないものや塗膜だけが出土したものもある。大半が堀 211 から出土したもので、その他、溝 3B、溝 5、水路 60 などからも出土している。ここでは堀 211 から出土した遺物を中心にその一部を掲載する。

堀 211 (木 1～木 19) 漆製品や下駄、板状製品などが出土した。木 1 は板状製品の一部で、端部を丸く削り、直径約 2.5 cm の孔を開ける。片端は鋸状の切断痕がある。樹種はスギである。木 2・木 3 はともに箱物の部材の同一個体であると考えられる。片面端部の合わせ目に強度をつけるために縦 1.3 cm・横約 3 cm の布を貼り、黒色漆を塗る。樹種はスギである。木 4・木 5 は差し歯下駄である。ともに後側が欠損している。平面形は楕円形を呈し、下面の浅い多が溝と臍穴に歯を嵌める。臍穴は木 4 に 2 箇所、木 5 には 1 箇所ある。樹種はともにセンダンである。木 6・木 7 は連歯下駄で、ともに平面形が方形を呈し、四方に面取りを施す。樹種は木 6 がモミ属、木 7 はツガ属である。木 8・木 10・木 12 は板状製品である。木 8 は片面に削りと面取りを施し、端部に臍穴を開ける。一方の端部は欠損している。樹種はスギである。木 10 は端部に臍をつける。樹種はヒノキである。木 12 は厚みの薄い板で樹種はスギである。木 11 は桶の底板で両端面に底板を繋ぐための木釘を通す穴がそれぞれ 2 箇所開けられている。樹種はヒノキ科である。木 9・木 13 は棒状製品である。木 9 は柄杓の柄で、上部の穴に木釘が遺存する。樹種はヒノキである。木 13 は 2 箇所に円形の穿孔があり、用途は不明。樹種はスギである。木 14～木 16 は漆器椀で、木 14・木 15 は口縁部と高台の一部が欠損する。木 14 はやや大振りの椀である。全面黒色の漆塗りで、見込みに「/」「・」を組み合わせた記号を赤色漆で描く。樹種はトチノキである。木 15 は外面黒色漆に赤色で「◎」の中に模様を描き、内面は赤色漆を塗る。樹種はブナである。木 16 は椀の底部で、全面黒色漆を塗り、見込みに赤色漆で鶴を描く。樹種はトチノキである。木 17 は曲物底板で、判読不明の墨書がある。樹種はヒノキである。木 18 は曲物の底板で、内面に黒色漆を塗る。樹種はコウヤマキである。木 19 は差し歯下駄の歯である。樹種はクリである。

溝 3B (木 20～木 24) 漆器、桶、箱物などが出土した。木 20 は漆器椀である。全面黒色の漆塗りで、外面と見込みに赤色と茶色の漆で草花文を描く。樹種はトチノキである。木 21 は桶の側板である。外側にタガを嵌めた圧痕がつく。樹種はヒノキ科である。木 22 は曲物の底板である。中央より端側に 1 箇所の穿孔があり、端面には板を繋ぐための木釘を通す方形の穴が 2 箇所開けられている。樹種はスギである。木 23 は箱の側板、木 24 は箱の底板である。側板は隣り合う側

堀211

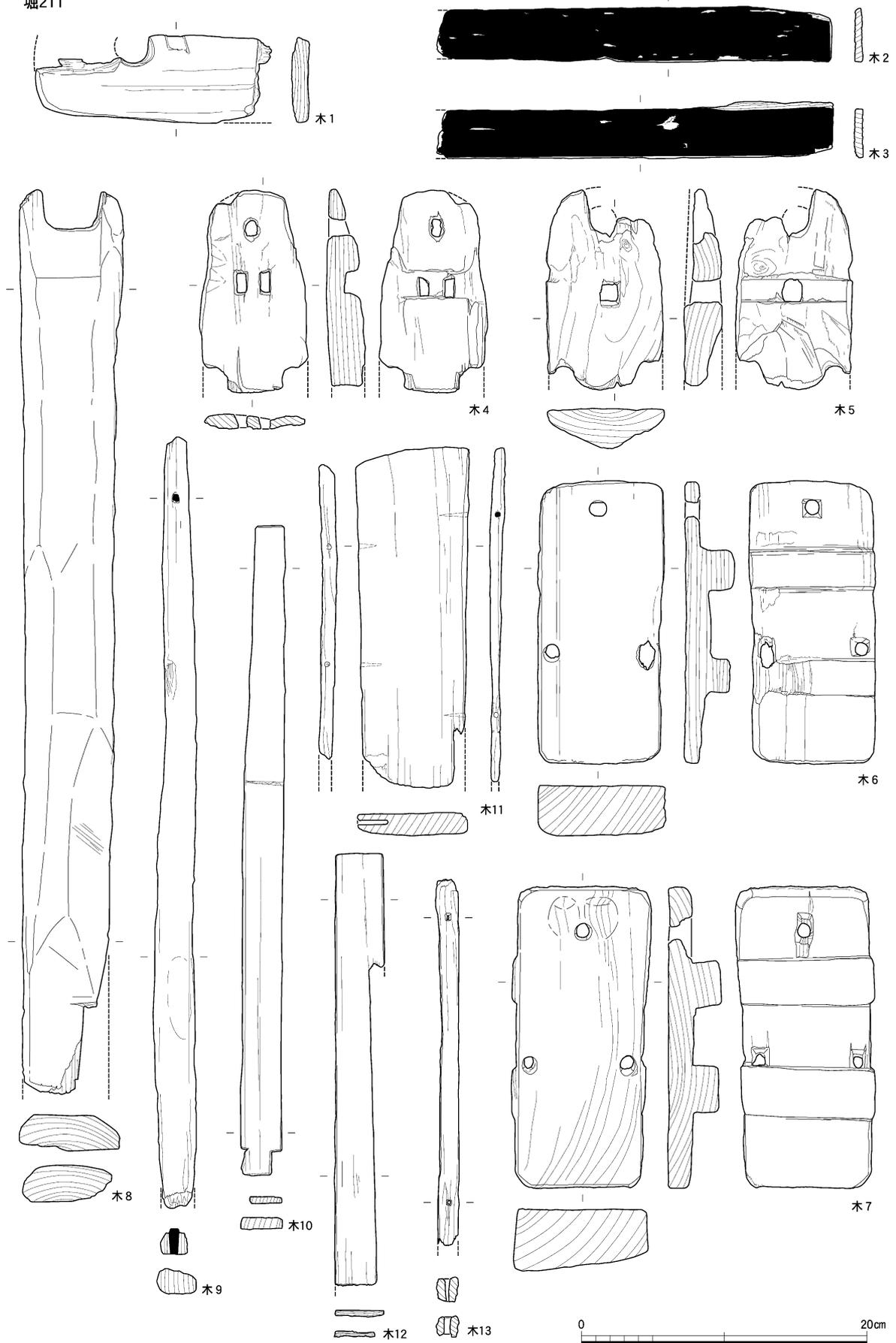


図29 木製品実測図1 (1:4)

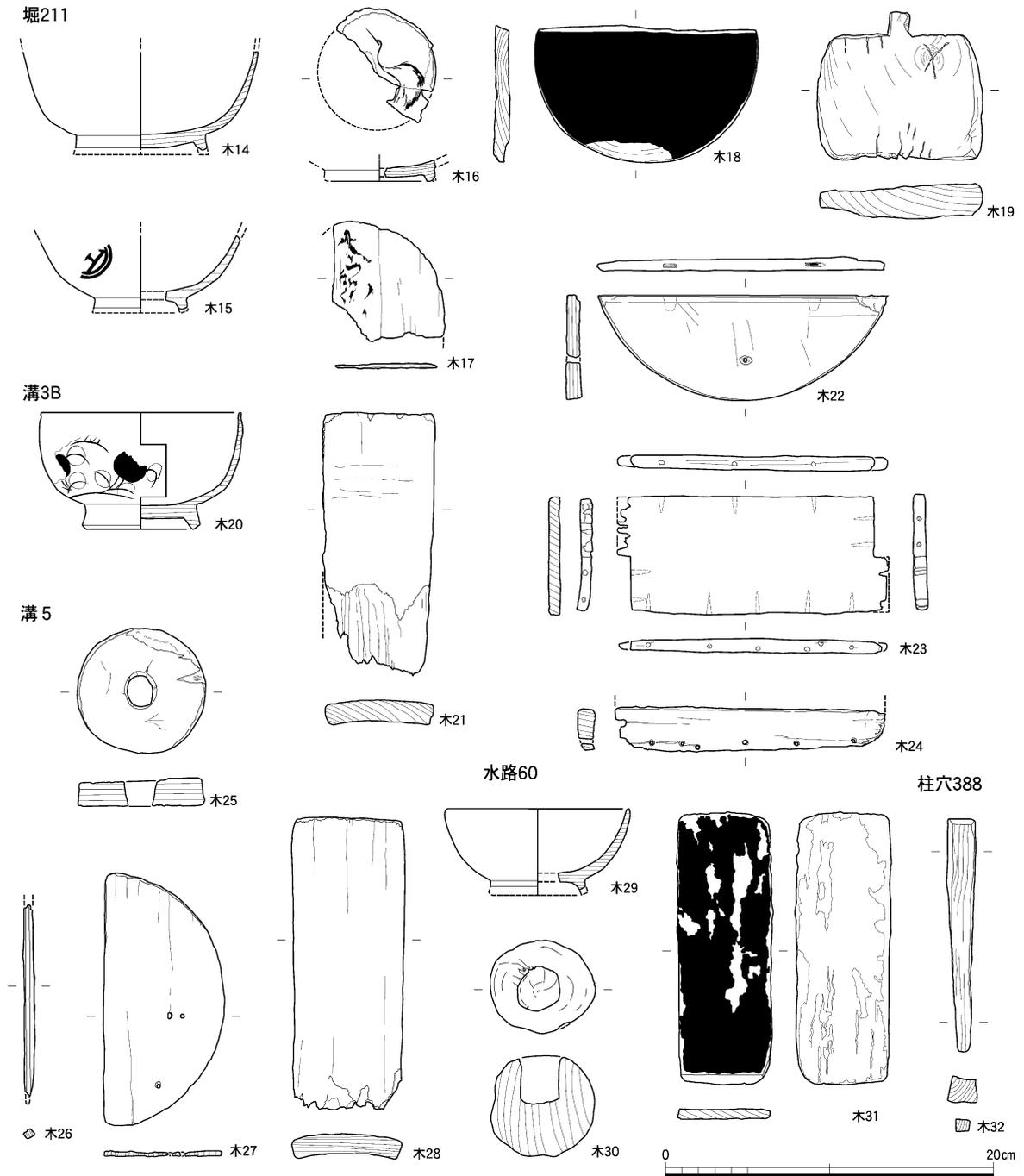


図30 木製品実測図2 (1:4)

板を組み合わせるため交互に両端の1/2を切り落とし、残りの端に釘穴を2箇所開ける。側板の下部と底板には釘穴を4箇所開けて木釘で組み合わせる。側板上部は3箇所の釘穴があることから、もう1段側板がつく。樹種はともにヒノキである。

溝5 (木25~木28) 木25は環状木製品で、平面円形の中央に約2cmの孔を開ける。用途は不明。樹種はアカガシ亜属である。木26は箸である。両端部は欠損する。面取りを施し、先端部は細く削る。樹種はスギである。木27は曲物の底板で、3箇所穿孔がある。樹種はヒノキ科である。木28は桶の側板である。樹種はヒノキ科である。

水路 60 (木 29～木 31) 木 29 は漆器椀である。全面赤色漆で、樹種はトチノキである。木 30 は木球である。球の中心に直径 2.5 cm・深さ 2.8 cmの穴を刳る。表面は調整痕不明。樹種はカキノキである。木 31 は箱物の一部で、外面は赤漆、内面は黒漆を塗り、内面の底板がつく部分は塗りが無い。樹種はヒノキである。

柱穴 388(木 32) 木 32 は木栓である。断面は方形に、先端部は細く削る。樹種はヒノキである。

(8) その他の遺物 (図 31)

その他の遺物として、堀 210 の最下層から出土した骨・貝がある。骨にはウシの右大腿骨・ニホンジカの右肩甲骨・イヌの左橈骨があり、これらは死んだ動物か、食用にした後の骨を堀に遺棄したものと考えられる。貝類はイシガイ・ドブガイ・マツカサガイ・マルタニシ・カワニナ・クロダカワニナがある。なかでもマルタニシは卵胎生で、幼生は親の体内から検出したものである。いずれも淡水産の貝で堀に生息していたものと考えられる。溝 3B でも中央北よりの深くなった底でマルタニシが出土している。

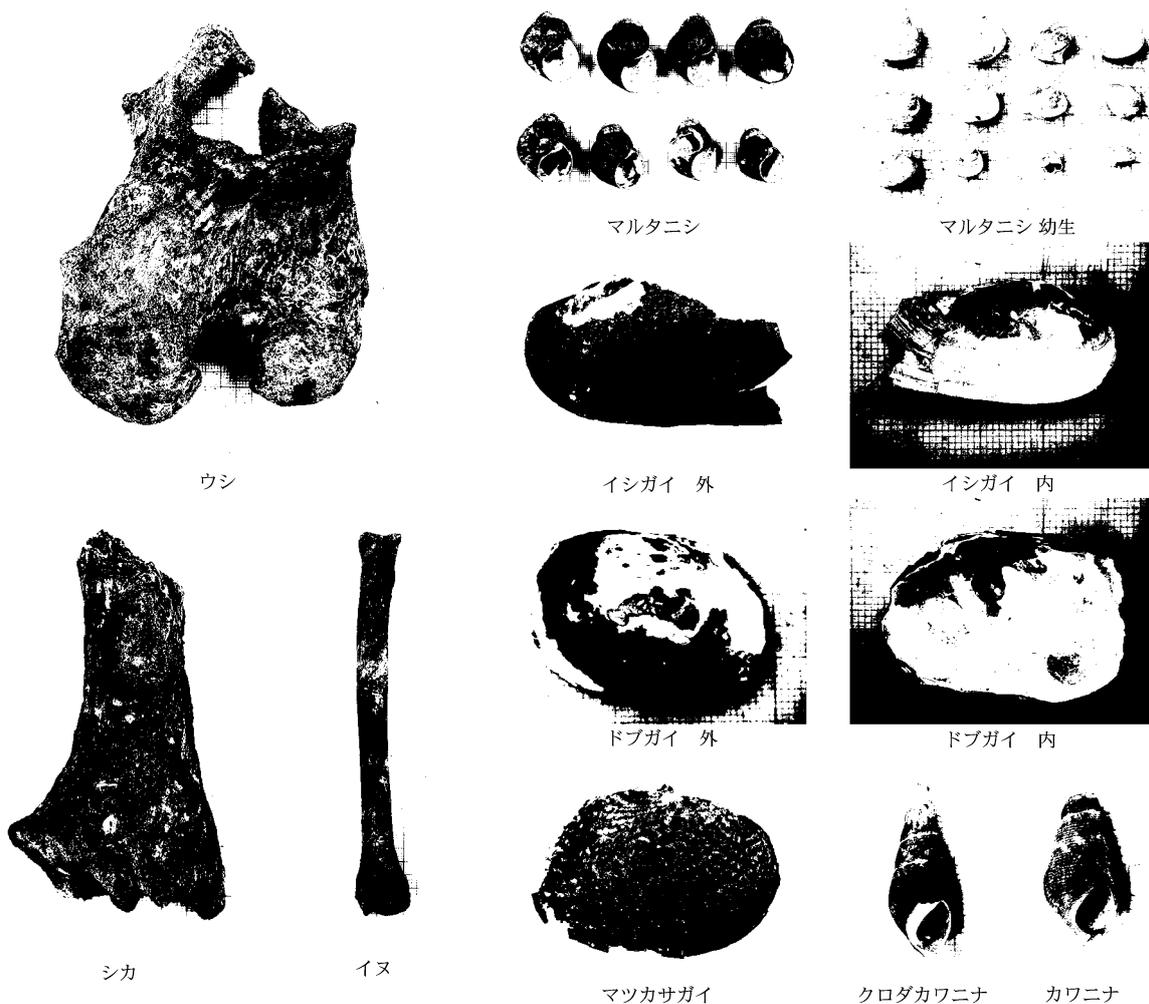


図 31 堀 210 出土獣骨・貝類

5. ま と め

(1) 遺構の変遷 (図 32)

今回の調査によって、大藪遺跡・大藪城跡の東限域の様相を明らかにすることができた。大藪遺跡に関しては、遺跡の東限域に近く、微高地から桂川の後背湿地に移る地点に立地しているため、弥生時代の遺構を検出することはできなかった。しかし、1点のみ出土している石鏃未製品は弥生時代のものの可能性が考えられ、今調査では確認できなかったが、周囲に関連する遺構が検出される可能性がある。

大藪城跡に関しては、掘立柱建物、柱穴、井戸、柵などを密集した状態で検出した。1区では2010年度その1調査と合わせると掘立柱建物1棟を復元することができ、東に開く門と柵が建物の外側に巡る。それらは堀210・211、溝3Bなどで区画されている。堀210は幅や深さなどの規模から、大藪城の外堀と考えられる。堀211には溝3Bが接続しており、両者は城内の水路となっていたと考えられる。また、2区では1999年度の調査成果と合わせると掘立柱建物1棟を復元することができる。掘立柱建物、柱穴、井戸、柵、溝などからは土師器、瓦器、施釉陶器、焼締陶器、砥石、石臼などの遺物の出土があり、日常的に使用されたものであろう。

今回の調査では掘立柱建物、柱穴、井戸、柵、堀、溝などで構成されていること、当調査地の小字名が「里ノ内」および西隣は「城屋敷」であったことなどから大藪城内の施設と考えられる。さらに今回の調査では痕跡は残っていなかったが、堀210と溝3Bとの間に土塁があった可能性が考えられる⁵⁾。調査地を含む大藪町周辺は、中世以来、久我家領に含まれる荘園となり、室町時代には牛ヶ瀬・上久世などともに西岡十一ヶ郷を形成し、一揆の際の政治的・軍事的拠点として重要な役割を果たした。今回検出した遺構は、外敵に対する防御的な側面も考えられ、室町時代から戦国時代の集落の変遷を考えるうえで貴重な成果となった。

江戸時代には、調査地を含めた周辺は居住地と耕作地であったと考えられる。1区耕作溝群は、溝1から東は少なくなる傾向がみられ、さらに溝3Aから東はほとんどみられなくなっている。江戸時代の耕作地は、この辺りが東端になるものと推測される。17世紀終わり頃に、堀210・211を埋めて整地した後に溝1・4・5・55が掘られた。その頃には溝3Aは掘られていなかったと思われる。溝3Aは18世紀に入ってから掘られ、それに溝4を直結させたと考えられる。また、溝1・3A・4・5は、この調査でみられる他の溝の規模、特に深さを比較しても深く掘削していること、出土する遺物の量や種類の多様さをみても、耕作に伴う溝とは明らかに用途が違うと考えられる。耕作地内を通る用水路の役割があったものと思われる。

2区では、調査区西端に柱穴群がみられ、大藪街道沿いに建物が建っていたことが窺えるが、具体的な様子をとらえることはできなかった。

今後、周辺での調査がすすむことにより、中世以降の集落の変遷のより詳しい状況が解明されると期待できる。

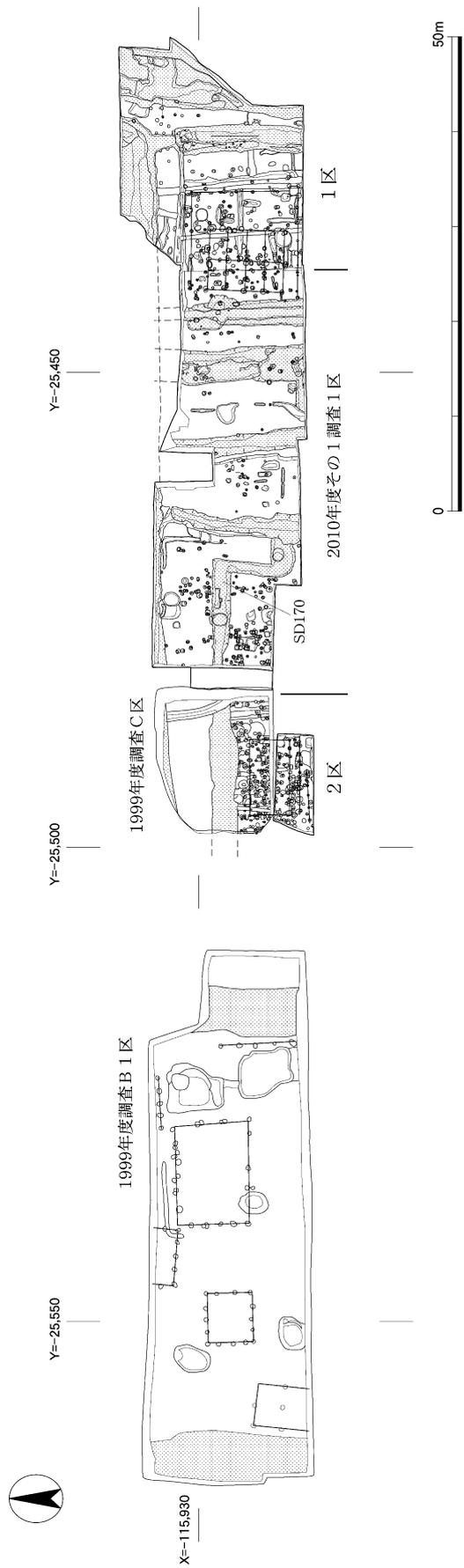


図 32 中世から江戸時代初頭遺構図 (1 : 700)



北東隅推定地 (北から)



北西隅推定地 (北西から)



西限推定地 (南から)



南東隅推定地 (南東から)

図 33 大藪城跡の現況

(2) 中世大藪城について (図 32・33)

1997年から、断続しつつ行われてきた都市計画道路整備事業に伴う発掘調査は、大藪城の中枢部を横断する調査となった。

1999年度の調査では、東西4間×南北3間、東西6間×南北5間の2棟を含む掘立柱建物5棟、柱穴、柵、井戸、園池、溝、堀など中世の遺構が検出され、堀で区画された中に建物・井戸などが整然と配置されていることが明らかになった。調査地の西端で検出された南北方向の溝は、大藪城跡の西限の堀と考えられる。2010年度その1調査では、掘立柱建物、柵、柱穴、土坑などの他に、1999年度の調査で検出した区画溝と繋がる東西溝を検出している。このように、今回の調査成果も含めて、大藪城跡では堀で区画される中に建物、井戸、溝などで構成された集落の様子が窺える。これらの遺構のあり方に共通する遺跡を周辺地域で求めると、伏見区久我東町・羽束師鴨川町に所在する久我東町遺跡、南区久世上久世町に所在する上久世城跡などがあげられる。久我東町遺跡は室町時代初頭から戦国時代の集落跡である。集落の東を桂川あるいはその支流が流れ、残り二辺を堀が開削されていた。堀の幅は最大で5mの大規模なものであり、その内側に建物7棟、井戸、墓などを検出している。各建物は溝で区画されていた。堀の内側には土塁があった可能性もある。⁶⁾上久世城跡は鎌倉時代から室町時代の集落跡である。1975年の調査で東西・南北の堀の他に建物、井戸、柵などを検出した。調査地の小字名が「城之内」であることから在地有力者の居館跡と考えられる。⁷⁾両者ともに大藪城跡に先行する遺跡であるが、大藪城跡にも同様の状況がみられることは、集落を構成する要素が中世末までそのまま引き継がれているものと考えられる。乙訓地方では方形区画を基本とする居館跡が数多く見つかっている。⁸⁾これらは防衛的側面の強いものであったと考えられ、⁹⁾戦乱に明け暮れた中世京都近郊の村落の状況を反映しているものとみられる。約30,000㎡と推定される大藪城跡の面積の内、これまでに約2,100㎡を調査したことになる。全容の解明はまだ先のことになるが、中世大藪城内の遺構のあり方についてある程度の傾向がつかめたと考えている。

註

- 1) 『京都市遺跡地図台帳【第8版】』京都市文化市民局 2007年
- 2) 「京都西南部」『土地分類基本調査 地形・地層地質・土じょう』経済企画庁総合開発局国土調査課 1972年
- 3) 「大藪村」『史料 京都の歴史 第13巻 南区』平凡社 1992年
- 4) 『京の城-洛中洛外の城郭-』京都市文化市民局文化部文化財保護課編 2006年
馬瀬智光「洛中・洛外の城館について-築城主体の類型化から-」『第12回京都府埋蔵文化財研究集会 発表資料-京都の城・構・館-』京都府埋蔵文化財研究会 2004年
- 5) 当調査地の南西に中世荘園として著名な久我荘がある。江戸時代に成立されたものであるが『老彦集』(別名『山城国乙訓郡久我里風土記』)には中世末頃の久我里の様子が記されている。その中の「城」の項目に「…土手堀有之」とある。(岡野友彦「山城国乙訓郡久我村風土記『老彦集』について」『ぐ

んしょ（季刊）』再刊第16号 株式会社続群書類従完成会 1992年）

- 6) 「久我東町遺跡」『昭和61年度 京都市埋蔵文化財研究所調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所

1989年

- 7) 堀内明博・百瀬正恒・吉村正親「上久世城ノ内遺跡」および註4) 文献（『佛教芸術』115 毎日新聞社 1977年。築城者は寒川氏と推定している。
- 8) 大山崎町歴史資料館『京都の城、乙訓の城 - よみがえる戦国の城郭 -』1998年
- 9) 木下 良「IV西岡地方における城館と防御集落」『京都社会史研究 同志社大学人文科学研究so研究叢書Ⅻ』同志社大学人文科学研究so 1971年
- 10) 「京都市内城郭一覧表」（註4）

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおやぶいせき・おおやぶじょうあと							
書名	大藪遺跡・大藪城跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2010-13							
編著者名	南出俊彦・田中利津子							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2011年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おおやぶいせき 大藪遺跡 おおやぶじょうあと 大藪城跡	きょうとしみなみく 京都市南区 くぜおおやぶじょうちない 久世大藪町地内	26100	773 778	34度 57分 17秒	135度 43分 18秒	2010年7月 26日～2010 年11月2日	410.71m ²	道路整備 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
大藪遺跡	集落跡	弥生時代		石器				
大藪城跡	平城跡	古墳時代		須恵器				
		長岡京期		土師器、須恵器、瓦、 土製品				
		平安時代		土師器、須恵器、瓦、 緑釉陶器、灰釉陶器				
		室町時代後期 ～江戸時代初期	掘立柱建物、門、 柵、井戸、柱穴、 堀、溝、土坑	土師器、瓦器、施釉陶 器、焼締陶器、木製品、 金属製品、土製品、石 製品				
	江戸時代後期	整地層、耕作溝、 柱穴、溝、水路、 土坑	土師器、瓦器、施釉陶 器、焼締陶器、木製品、 金属製品、土製品、石 製品					

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-13

大藪遺跡・大藪城跡

発行日 2011年2月28日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961